

風の末裔シリーズ・6th シーズンの1
～ホライズン～



筋雲美しい砂丘の春空に、螺旋(らせん)を描く二騎の馬影。

やがて螺旋は低空飛行になり、地表スレスレに砂を舞い上げて着地する。

「やっほお、今日は僕の勝ち！ お前の馬の方が、砂に足を着くのが早かった！」

青毛の馬上で、癖っ毛に赤いバンダナの少年が叫んだ。元氣一杯の伸びやかな手足は、砂漠の民の艶やかな鮎色だ。

「うーん、どうかな？ 僕、結構粘れたんだけどな」

薄茶のパロミノ馬に跨った少年が、振り向いて足跡を確かめた。こちらの少年は、砂漠の民にしては色素が薄い。肩に掛かる髪は、猫っ毛の青銀だ。

「ちえっ！ おーい、ファー!!」

バンダナの子供が、砂山の向こうに声を掛けた。

小さい駱駝が砂山を越えて、テクテクと追い付いて来た。背中では、ヒューミみたいな青い目に、色白そばかす鼻の、小さい女の子が揺れている。

「見てたよな、パロミノの方が先に地に足を着いたら」

「ん・んんんんん」

駱駝の女の子は、勿体ぶって指をこめかみに当てた。

「残念ながら、お兄ちゃんの青毛の方が断然早く落っこちたわ。それに、カノンの描いた弧は、とっても綺麗だった！」

「何だよ、お前、カノンが好きだからテララメ言ってるんだろ！」

「きゃあん、アタシは公明正大よ！ 助けて、カノン！」

掴み掛かる男の子を避けて、女の子はもう一人の男の子の後ろへ回った。

「妹を苛めるなよ、レン。風がちよっと僕に気まぐれ起こしてくれただけだよ」

カノンと呼ばれた少年は、指を二本立ててスツと振った。小さなつむじ風が、彼の髪をフワッと持ち上げて後ろへ抜けた。

前髪の下の明るいオレンジの瞳を、ファーは斜め下からホワーンと見つめている。

「分かんないよ、そんなの。僕、お前みたいに風を自由に扱える長の息子じゃないモン」

レンと呼ばれた少年は、まだ不服そうに口を尖らせた。

「関係ないよ。それで言うのなら、里で一番飛ぶのが上手いのは、君のお父さんじゃないか」

「うーん、まあね」

レンが言葉を濁したのに、ファーが暢気に口を挟んだ。

「カノンのお父さんだって、きっともっと凄かったよ。昔、父様と一緒に、何回も、北の草原まで飛んだんでしょっ？」



「…うん…多分ね…」

レンは、このバカ！ って顔で妹を睨み付けた。カノンは父親の話をされると、一気にテンションが下がるのだ。

上空の筋雲がサアツと形を変えて、ほぐれて散った。

「あっ！」

目のいいファーが一番に見付けて指差す空の一点が、みるみる大きくなり、立派な騎馬の姿となった。

「レン！ ファー！」

レンの青毛より一回り大きな青毛に乗った旅装の男性が、太陽を背に降りて来た。

「父さん！」

「わあい、父さま!!」

兄妹は馬を飛び降りて駆け寄った。

「よおーす、ただいま。元気にしてたか？ チビッ」共！

「うん！ ね、ね、僕、里から足を付かずに岩山まで飛べるようになったんだよ！」

「ファーも、ファーも、ニガウリ食べられるようになったよ！」

「ああ、ああ、二人とも、偉いぞ。帰ってからゆっくいな」

男性は馬から降りて二人を順に抱き上げてから、やはり下馬してこちらを見ているオレンジの瞳の少年に、声を掛けた。



「久しぶりだな、カノン。元気にしてたか？」

「はい、おかえりなさい、シドさん」

四人で砂漠を帰る途中も、レンとファーは、はしゃぎっ放しだった。

「ね、父さん、今回の外交路には、海岸の国もあったんでしょ。船って見た？ 大きいのー！」

「ファーも、ファーも、お船見たよ、絵本でー！」

「ああ、大きな港のある街だった。カノン、知っているか？ 鯨

岩の街」

シドは、少し遅れて後ろを歩く少年を振り向いて声を掛けた。

「はい、地理の授業で習いました」

カノンはポツンとだけ答えて、会話は途切れてしまった。本当はこの子供は、もっと多くを知っている筈なのだが。

「シドー！」

西風の里の入り口で呼び声がした。反対方向から、三頭の馬が地表すれすれを飛んで来る。

真ん中は、里でただ一頭の草の馬に乗る、長い三つ編みの女性。鞍の前に、二歳位の幼子を抱えている。

両脇の童顔の少女達が、シドを見て「ヨコンとお辞儀をした。

「おかえりなさい。お疲れでしょう」

「ただいま、エノシラ。おお、ミィ、ちょっとした間に大きくなったな。君は往診かい？」

「ええ、砂の民の部落の方に。貴方達、今日はもういいわよ。お疲れさま」

「はい、エノシラ先生、さようなら」

「タンナ様とごゆっくのィー」

「くらー！」

二人の少女は舌を出してキャラキャラと笑いながら、里の入り口の結界を越えて消えた。医師であり助産師でもあるエノシラに師事している娘達だ。

「母さま、お腹空いた！」

「はいはい、帰ったらすぐご飯にしましょ。レン、ミィを背負って頂戴」

「ぶえーい」

「返事はハイですよ。ああ、カノン、貴方もこのままいらっしゃいな。後でルウも呼びつもりだから」

この家族の母親も、少し離れた少年に声を掛けるのを怒らなかつた。

「有難う、エノシラさん。でも、僕、ちょっと調べ物があるの。」

後で母と伺います」

カノンは固い口調で言って、レンに手を振って、先に部落へ駆け込んだ。

二人の大人は顔を見合わせ、ちょっと嘆息して、賑やかな子供達を連れて里への結界を越えた。

カノンは馬を厩に戻し、自宅には向かわず、修練所の旧棟への坂を登った。

昔は、孤児達や独身の教官の宿舍だったが、建物が老朽化し、今は物置に使われている。その一部屋に用事があった。

「あれ？」

いつもは閉じている窓の板扉が、開いていた。

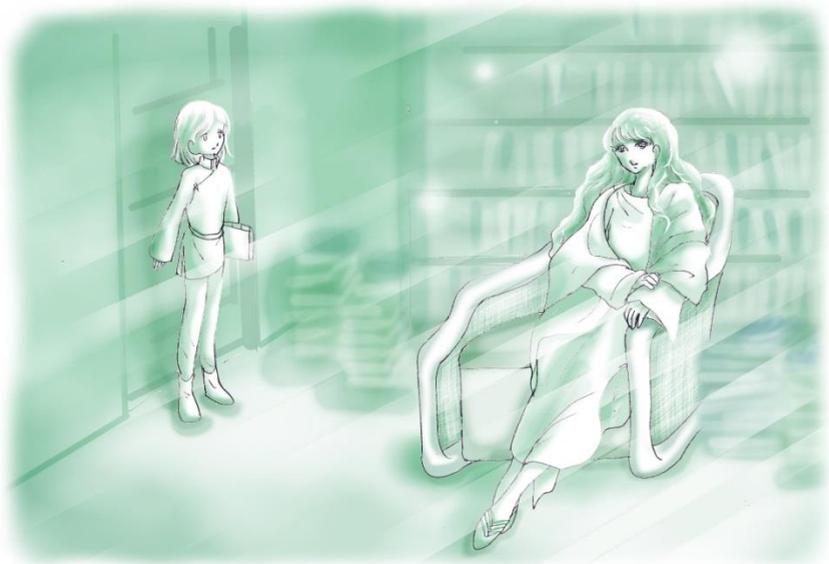
「…また…」

この部屋に来るのは、自分の他には、一人だ。

建物に入って戸口へ回ると、廊下に面した扉も、薄く開いていた。静かに近寄って、そおっと中を覗う。

窓から射し込むオレンジの夕陽の中、自分と同じオレンジの瞳の女性が、ほおっと長椅子に腰掛けて居た。視線は向かいの壁で、そこには、白い絹糸で縁取りされた青磁色の長衣が、掛かっている。

十二年前…、袖を通される事のなかった、新郎の晴れ着……。



——そのオレンジの瞳が、幸せしか湛えていなかった頃の、夏の夜——

蒼薇色の頬に息を弾ませて、十七歳のルウシエルは、修練所の教官寮への夜道を登っていた。

ソラが帰って来るのは今日だけだ。明日からまた南の沿海州へ旅立ってしまう。

まったく外交官って、慌ただしいっただけじゃない。他部族との擦り合わせを怠ると、西風なんてちっぼけな部落はあつと言つ間に崖つぶちに持っていかれるとか言つて、いつもいつも出張ばかり。

まあ、来月の式の後には休暇を作るって言っていたから、その時に、思う存分一緒に過ごして貰おうつと。

「よし、まだ、帰っていない」

久し振りの部屋に、そろりと入り込んで、カンテラを灯す。

同居していたシドが、昨年所帯を持って引越して以来、また一段と書物が増えたみたいだ。芦紙を綴じた物、羊皮紙を巻いた物、細竹を連ねた物。古今東西の書物が所狭しとひしめいて、まるで書物の森。

ため息して、抱えていた包みを降ろし、壁のニヶ所の書物を移動する作業を始めた。

「ルウシエル?!」

戸口に久し振りの声がして、彼女は飛び上がった振り向いた。「あっ、ソラ、お帰り。ごめん、勝手に入って」

「た、ただいま…」

旅装マントのフードの下、緩んだ顔を慌てて隠して、彼はいつもの先生口調になった。

「しかし、レディが殿方の部屋に来る時間ではありませんよ」

まったく、もうすぐ婚礼の儀式を挙げるっていうのに、どこまで堅物なんだか…。

ルウの母のモエギは、この春から長の仕事をすっかりルウに譲って、砂の民の部落の田舎家へ隠頓している。気を使う相手なんていないのに、このヒトは、キチキチキチンとケシメを付けていたいようだ。

「うん、でも、明日にはまた沿海州へ行っちゃうでしょ。どうしても、これを見て貰いたくって」

「…?」

ルウの指し示す書物をどけた壁に、柄の長い衣紋掛けに、青磁(せいじ)色の長衣が下がっていた。白絹の縁飾りがカンテラの灯りを反射して、オレンジに映える。

「……………」

ソラは口をホカんと開けて、刺してはほどいた跡のある襟の刺繍を見つめた。まさか、うそだろ？　子供の頃から、このヒトの針を持つ姿など、見た事がない。

「えと、こないだの市でさ、この布見付けて、ソラの髪の色とおんなじだなあ、って眺めていたら、エノシラが、新郎の晴れ着を縫ってあげたら？」って「

「……………」

「わ、私はガラじゃないって言ったんだけど、エノシラが、ト生」一度の機会だからって強引に。んで、教えて貰って…」

「……………」

「あんまマジマジ見んな、あちこち雑なんだから！」

「……………」

ソラは驚きも感動も通り越して、口を開けたまま、ルウシエルの前にフラリと立った。そうして、絆創膏を巻いていない指のない両手を、強く握って引き寄せた。

「し、式を挙げるまでは『清く明るくガラス張り』じゃなかったのか？」

ルウはやっと分かった。

接触感応の力の強いソラが、ヒトと肌を重ねる事…、それはとても勇気の要る事だったんだ。

——怖かった、貴方の全てを知る事が——

夕べ初めて弱さを曝さらけて白状してくれたヒトを、朝、書物の部屋の窓から見送った。

——この身の全てを分かち合う事が、どうして怖くなどあったのだろう——

ルウの大好きな艶やかな青銀の髪は、一度振り向いて小さく手を振ってから、坂の下へ消えた。

予定を越えて、婚礼間近になっても戻らないソラを案じて、シドが沿海州へ飛んだ。

そうして見つけて連れ帰ったのは、鞍の鎧あぶみ皮の切れ、ソラのパロミノだった。

「V字谷の抜け道付近をウロウロしていた。あそこ、気流が悪くて危ないけれど、近道だったんだ…」

西風の者、砂の民の部族の者、そして遠く蒼の里の長までもが駆け付けて、皆で搜索したが、青銀の髪の妖精は見つからなかった。

ルウシエルは、周囲が逆に心配になる程、感情を表に現さなかった。駆け付けた谷の深さを見て顔色をなくしたのは、本当なら幸せな花嫁になる筈の、婚礼の当日だった。

気遣う周囲に逆に気遣い、搜索してくれる皆の身を案じ、た

だ黙々と長の顔で、やるべき仕事をこなした。母のモエギや父のハトゥン、親友のエノシラが隙間を開けずに側に居たが、それに対してすら気遣いをした。

そうして、成果のない搜索の二週間目に、自ら打ち切りを宣言した。自分が決断せねば、搜索を終われないのが分かっていった。

西風のソラは、里に居る時間が少なかったので、親しいヒトはそんなに多くはなかった。しかし、このヒトが帰って来ないってだけで、里はひとつの火が消えたようだった。

死んだと決まった訳ではないので、葬儀も墓も作られなかったが、他部族からの使者がひっきりなしに弔問に訪れた。元老院が腰を抜かすような大国の物が、自らやって来たりもした。そんな来客達に、ルウシエルは長として堂々、遜色なく対応した。

里の者達は安堵した。危なっかしく思っていたが、この娘もいつの間にか一人前に、長らしく成長しているではないかと。

シドは、順調だった教官の仕事をスッパリ辞めて、ソラの後を引き継ぐ決心をした。

エノシラは二つ返事で賛成し、忙しい助産師の仕事をやりながらも、全力でサポートした。慣れない外交は大変だったが、

マメなソラがキッチリ付けていた記録がパロミノの鞍袋に残されていて、助けられた。

修練所のシドの抜けた穴は、先輩教官のスオウが胸をトンと叩いて引き受けてくれた。

モエギは隠居の田舎家へ戻り、ハトゥンは殆ど引き継いでいる砂の民の総領の役割に戻った。

そんな風に、皆が、ソラがない事を受け入れ始めた。

せっかちな老人達が、影でルウシエルの縁談を囁き出した頃、さすがのエノシラが、真っ先に気付いた。

「ルウ…、太…ったんじゃ…ないヨネ？」

「私が絶望の気持ちを持つと、それがこの子に流れ込む。この子の血肉は、未来への希望で創られねばならない」

ルウシエルの懐妊の報せは、全ての者を躍り上がらせた。

「さすが、母は強しだね。ソラの命を引き継いでいたから、あんなに強くいられたんだ」

シドとハトゥンが嬉しそうに葡萄酒の杯を打ち合わせる横で、エノシラはただ一人、不安を拭えなかった。女性って、いきなり母になれる訳ではないし、母になったからって、いきなり強さが備わる訳じゃない…。

春の花の咲き揃う穏やかな日に、ルウは、ソラにそっくりな

男の子を、この世に送り出した。

——そして、エノシラの不安は…的中してしまった——

夕陽のオレンジの中、長椅子の女性は、部屋にカノンが入って来ても、視線を動かさなかった。

少年は、黙ってそのヒトの横まで歩き、片手を肩に置く。

「っ？!!」

女性は目の焦点が合って、ビクッと飛び上がった。

「目が醒めた？」

「……………」

「貴方は誰？」

「…西風の…ルウシエル…」

「僕は誰？」

「……………」

「分からない？」

「…カノンだ、私の息子…」

カノンは肩を降ろした。今日はそんなに記憶は飛んでいないみたいだ。

「シドさんが戻って来たよ。エノシラさんが、今日、夕食にどうぞって」

少年は母に背を向けて、書物の山を越えて探し物始めた。

「シド…エノシラ…」

「分かる？」

「ああ、…シドは私の乗馬の先生で、…エノシラは、母親代わりだ」

「惜しい所だね。合っているけれど、それ、僕の生まれる前」

カノンは、嫌でも、母親の人生の出来事と順番を暗記してしまっていた。

「そうか…、カノン、何、探してる？」

「西の大陸の歴史の書物。この前三巻まで読んだんだけど」

「左の棚の真ん中あたりだ」

「えっと、左の…あ、あった！ サンキュー！」

「よかったな。読んだら元の位置へ戻して置くんだぞ」

カノンは必要な書物を引っ張り出して、ルウに向かって振り向いた。

「ねえ、また読みたいし、まとめて置いてもいいでしょ。みんなバラバラにあるんだもん」

「駄目だ!!」

ルウは頬杖を付いて、フイと窓の外へ向いてしまった。カノンは書物の山を崩さないよう乗り越えて、彼女の横まで戻った。

「分かったよ、ごめん、ルウシエル。ちゃんと戻して置くから」

「ああ…」

カノンは、母親を名前で呼ぶ習慣が付いていた。このヒトはたまに息子の存在すら忘れるからだ。

「面白いよ、西国の歴史」

「ああ、私も、好きだ。全部読んだ」

「今晚、議論しようよ」

「ああ」

カノンがこの世に送り出して…張り詰めていたモノがブツと切れて…ブツブツブツブツブツと切れて……

ルウシエルの記憶は振り子のように、過去の空間を行ったり来たりになってしまった。

初めは皆、難産で疲れて呆けているだけだと楽観していた。

でもエノシラがすぐ、ただ事ではないのに気付いた。幾ら何でも、子供を生んだ事すら忘れるのは、異常だ。

普段の生活や、知恵や知識に関しては、そんなに差し支えない。混乱するのは、ソラが介在した出来事や、ソラの周囲のヒトに関する記憶だけなのだ。

そつと……

「なあ、カノン??」

「何?」

「私…、ここで、誰を待っていたんだっけ?」

「……………僕じゃないかな」

「そつと…」

砂漠の流砂が太古の遺跡の傷痕を呑み込むように、ルウシエルの記憶から、ソラの存在がガボツと抜け落ちていた。

人生の所々、時には随分長い間、穴が開いたように無くなってしまっている。それでもヒトって何となく生きて行ける。

でも…、ルウは、ふと宙を見つめる。

私の人生ってこんな、渴いたモノだったっけ?

カスカスの干からびた果実のみたいな心の中で、常に投げ掛けられる疑問がある。

例えば、何で暇さえあればここに来るのか? 何でこの書物を動かしたくないのか? いつも目を吸い寄せられる、あの壁の長衣は、誰の物?」

ルウシエルには欠片も分からない。分からないが、奥底にある何かが突き動かして、本能のようにここに来る。分からないけれど、ここに来ると、渴いた心に何かが染み込む。

シドもエノシラも、ルウの前であえてソラの話をしなかった。

これ以上心を揺さぶると、最後の糸がブツツと切れてしまいうそで怖かった。それに哀しみを封印してしまったのなら、そ

それはそれでいいんじゃないか？ って気持ちもあった。

ただ、カノンを不憫に思っていた。それでなくとも賢く感受性の強い子なのにと、何かに付けて気を使ってくれた。

カノンは、その気持ちは有り難いとは思っているけれど、素直に受け入れられなかった。だって、自分は、シドさんちの子供じゃないんだもの…。

窓を閉めて建物の外へ出ると、薄暮はくぼの坂を登って来る者があった。

「こんばんは、ルウシエル殿。やあ、カノン」

筋骨逞しいこのヒトは、修練所の教官のスオウだ。

「こんばんは、スオウ殿。この春から主任教官になられたそうですね。おめでとう」

ルウはサラッと挨拶した。ソラが介在しない人物や出来事に関しては、記憶に支障がない。

スオウは微笑んで礼を言い、それからカノンの方を向いた。

「カノン、ちょっと手伝いが必要なんだ。頼めるかな」

「…はう」

「ルウシエル殿、カノンを少しお借りして宜しいか？」

「先にシドさんちへ行ってよ。すぐ行くから」

「ああ、分かった」

ルウは、暗くなりかけている坂道を、しっかりとした足取りで下って行った。

それを見送って、スオウは抱えていた書束の中から何枚かを引っ張り出した。

「長殿が計画する来季の物品の分配の予定表。これで提出すれば、元老院は文句の付けようもないと思う」

「…有り難うございます」

「またややこしいような書類が元老院から回って来たら、言いなさい。文句の出ないよう」に、きちっと仕上げてあげるから」

「……………」

「心配しなくともいいよ。長殿をサポートするのは、私達、モエギ殿のお陰でちゃんとした教育を受けられた者の、役割だ」

「スオウせんせ、あの…」

「ん？」

「この間、エノシラさんがシドさんと話していたの、聞こえて。こういう仕事をこっそり手伝う為に、校長に就任する話を断って、主任で済ませたって…」

「……………」

「何か…、もう、何の為に？ って思っちゃう。もう、スオウ

せんせが長でいいじゃない？」

スオウは苦笑して、カノンの頭に手を置いた。

「カノン、長っているのはそういう物ではない。利口だとか、仕事が出来るとか、そんなのは違うんだ」

「風を流す力？」

「まあ、それもあるが、それだけじゃあない」

「分かんない。僕から見たら、ルウシエル以外の誰でも長になればいい。シドさんでも、長老さんでも！」

スオウは、痛ましい顔で少年を見た。

記憶の飛んでしまった母親が、名ばかりの長でいる状態が、いたたまれないだろう。

「カノン、もし私が長になれて言われても、断るよ。なれるとは思わない」

「……？　　そうなの？　　大変だから？」

「いや、んー……長っているのは、なる物じゃない。育つ物なんだ」

「なんだ……？」

「ああ、ルウシエル殿は、里を背負う運命に生まれ、逃げずに立ち向かい、立派に長に育った。その長殿が足踏みしているのなら、里の者が支えるのは当然なんだ。長は里を背負って、私達は長を支えて、里を支える。それでいいんだ」

「……………」

イマイチ納得行かないって顔の少年に、ちょっと早過ぎたかな、と、スオウは反省した。

「ああ、そうだ。この間話した、この旧棟の事だけれど」

「ああ、はいっ」

「やはり、老朽化で、梁の痛み具合が危険だと判断された。これ以上引き延ばすと、解体そのものが危険になってしまう……夏までに取り壊す事になった」

「……………」

「すまないな、こればかりはどうしようもない」

「……はい……」

「本とか運ぶ時、手伝うよ」

優しく言ってくれるスオウにお辞儀して、カノンはすっかり暗くなった坂を駆け降りました。

みんな優しい。

だけれど、本当に欲しいものは、誰もくれない……………。

シドの家で食事の後、一緒に片付けを手伝うレンが外へ水を汲みに行った隙に、カノンはそとエノシラに相談した。

「エノシラさん、自宅の横の診療所が手狭になって来たって言うていたでしょう。あの建物を使いたって言うたら、里には反対するヒトなんていないと思う」

「カノン、でもね」

エノシラは心痛そうに答えた。

「あの建物が本当に危険なら、ルウや貴方も危ないでしょう。それに、いい機会かもしれないわ」

「いい機会？」

「あの部屋にルウが閉じ籠るの、いい事だとは思っていません。たわ。ルウにも、貴方にも、まだずっと未来があるもの」

「……………」

「荷物を運ぶ時言ってる、手伝ってね」

「…有り難うございます…」

レンが水桶を持って戻ったので、その話は終わった。

居間では、ルウとシドが奥の椅子で茶を飲み、チビッコ達が床で喚声を上げながら、土産の菓子を広げていた。土産は勿論カノンの分もあり、少年は礼を言ってお受け取った。

初春とはいえ、帰りの夜道はかなり冷え込んでいた。ルウシエルは頭から被った長い駱駝の毛のケープを広げた。

「お入り」

素直にケープにくるまれて共に歩く子供に、ルウはポツリと呟いた。

「お前も苦手なんだろ。ああいう、ダンラン」

「…うん」

レンもファーも大好きだ。だけれど、家族セットになると、途端に遠い存在になる。

カノンは、ルウの匂いのする毛皮に鼻を埋めた。ケープの中でお互いの温もりが結び付いて、この世に二人きりしかない気分になる。

「何で私は、お前のお父さんを思い出せないんだろうな…」

「……………」

このヒトは、いつもいつも夢の世界にいる訳じゃあない。覚醒しては、抜け落ちた記憶に飢鳴して、苦しむ事を繰り返している。常に側で生活するカノンだけが知っていた。

「思い出せないお父さんなんて知らなくていいよ。僕、ルウシエルだけが、いてくれたらいいから」

「…お前は、優しい…。優しい、いい子だ…」

渡る風が、春の山から若芽の薫りを運んで来る。

血気盛んな砂の民の部落と言えど、こんな外れの田舎は、西風の里とそんなに変わらないのどかさだ。

山間の棚地に一軒の古家があり、窓辺に一人の女性が佇んでいた。ルウシエルよりも年輩だが、彼女の面影がある。

ウエーブの掛かった髪を緩く編んだそのヒトのオレンジの瞳は、山道を登って来る黒装束の騎馬を映していた。

鞍上は漆黒のハトゥン？　と思いきや、肩透かしを喰らう程のチビッコだ。体重が軽すぎて馬の反動に跳ね上げられながらも、子供用の補助具は一切使わず、一丁前に片手綱。

一際ひとまわり濃い鮎色の肌も、真っ黒な瞳も、幅広の口も、そっくりそのまま、ミニチュアのハトゥンだ。

「よくもまあ、あれだけ似たモンだ」

女性が窓枠に頬杖を付いて目を細めている間に、子供は前庭に到着し、馬から飛び降りて駆け寄って来た。

「母者ははじやー」

西風の里の前の長…、ルウシエルの母親のモエギは、娘に長の名を譲ってから、この田舎で隠頓していた。知る者は少ないが、ここは彼女の父の生家なのだ。ずっと空き家となっていたが、長引く病に、伴侶であるハトゥンの側で静養する事を勧められたモエギが、自ら此処を望んだのだ。

砂の民の総領殿も、その息子のハトゥンも、周囲の雑音は無視して、ただただモエギの希望を叶えた。

そうして、彼女は、砂の民に対するそれまでの総ての恩義と縁(えにし)に、応えた。皆がすっかり諦めていた跡取りを、病



んだ身を振り絞って、この世に送り出したのだ。

「薬と塩、持って来た。後、父者(てて)じゃから水菓子」

「ああ、ご苦労な」

子供は戸口を入って、女性のベッド脇に寄った。

「今日は、一杯食べた？ 痛いのはない？」

言ってから、サイドテーブルを見て、母を睨んだ。朝こしらえられた食事が、手付かずでそこにあった。

「あ、ああ…、大丈夫だ。アデルの顔を見たら、元気になった。

食べよう」

モエギは微笑んで、冷えた料理を膝に置いて口に運んだ。子供は安心して、小さい手あぶりに湯を沸かす為の鍋を置いた。

「そっだ、アデル、その棚に、庭で取れた春胡桃があるぞ」

「ホント？ あ、今、駄目だ」

「っ？」

アデルはモエギに顔を近付けて、にいと歯を見せた。

「前の歯三本、くーらへららっ」

「ほお・・・」

モエギは骨ばった人差し指で、子供の前歯をツンと突ついた。

「ダ、ダメダメ！ 余計にへらへらになるっ」

「バラバラに抜けるより、いっぺんに抜いちゃった方が、後の歯が真っ直ぐ生えて来るんだぞ」

そう言って、枕元の棚の裁縫箱に手を伸ばした。

山道を登って来る騎馬が二人。

「いいか、くれぐれも、モエギに気に病ませる話はするなよ。

最近また胸を痛がって、何日か寝込んだんだ」

「分かっているよ、僕ってそんなお喋りに見えるか？」

「ああ、見える」

「……………」

真っ白い馬の鉛色の女性と、黒砂糖色の馬の白い青年だ。

「おや、馬がいる。アデルが来ているな」

女性は馬を降りて、窓辺に駆け寄った。

「モエギ、ただいま、珍しいお客さんだ」

部屋の中を向いていたモエギは振り向いて、顔を輝かせた。

「お帰り、カーリ。おお、フウヤ!!」

「アガガガア——!!」

部屋の中に響く情けない悲鳴。

「ひ、ひロイよオ…、ゆっフリって言っファの…、急に、引

っファるんらもん…」

前歯三本、一気に引き抜かれたアデルが、涙目で床にうずくまっている。

「ごめんごめん、でも、いっぺんに済んで良かったじゃないか」
モエギは三本の糸にぶら下がった三本の小さい歯をブラブラ
させて、愉しそうに謝る。

「三峰では、抜けた乳歯は、固い実のなる木の下に埋めて、お
まじないをするんだ。後に丈夫な歯が生えますようにって」
フウヤが、カーリの馬に積んでいた穀物を、玄關に運び込み
ながら言った。

「へえ」

「わらわが埋めて来よう。アディ、来い」

カーリは三本の糸を受け取って、庭の端の胡桃の木に向かっ
て、駆けだした。

「ふわァい」

アデルも口を押さえながら、家を飛び出した。

「しかし、久し振りだな、フウヤ。ルウの所へは寄ったのか？」

モエギは怒越しに、白い青年に話し掛けた。

シドの婚礼以降、毎年冬になると砂漠を訪れるフウヤだが、
知り合いの多い西風より、何故かモエギの所へばかりやって来
る。まあ、理由はあからさまなだけだ…。…。

ソバージュ髪的美しいカーリは、総領殿の養女で、モエギの
義妹の立場なのだが、彼女を母のように慕っている。

アデルを生んだ後、極端に身体を悪くしたモエギに、誰に頼
まれた訳でもなく強引に同居し、ずっと付き添っているのだ。
アデルも半分はカーリに育てられたような物だった。

「沿海州の鯨岩の街で大口の依頼があつてね。ずっと制作して
いたんだけど、どうしても一体、ポーズが決まらなくて。そ
れでスケッチしに来たんだ」

フウヤは、今や、ちょっとした売れっ子彫刻家だ。夏は三峰
で過ごし、冬は依頼を受けて各国を飛び回る。彼の造る『踊る
天使像』は、各地で爆発的な人気を博はくしていた。

「ちょっとカーリを借りるよ」

「借りるとかセコセコ言っていないで、とっとと連れてっちま
え。砂の民の若い連中だって、結構あの子を狙っているんだぞ」

「それで僕に、総領殿にギタンギタンにされると？」

「ハハハ、まあ確かに、親父殿はカーリを目の中に入れてもい
いくらいの猫可愛がりだからな。それなりの覚悟が必要だ」

「そんな時は、モエギ、助太刀してよ」

フウヤにとってもモエギは、お袋さんの存在になっていた。

「それはそうとモエギ。最近、気になった事とかない？ 変わ
った話題とか」

「?? いいや、至って平穩だが？」

「そう？　じゃあ、いいや」

「フヤは切り替えるように手をボンと打って、腰の物入れから何かを取り出した。」

「これを作るの、手伝って貰いたいんだ」

「何だ？　これ、…笛…？」

朝の冷気に身震いして、カノンは目を覚ました。

西風の里の中心の宿屋跡。今はルウシエルとカノンの、二人にはちよっと広すぎる住居だ。

ガウンを羽織って、お湯を沸かしに厨房へ向かう。窓の外には、ひんやりした朝霧が立ち込めていた。

カノンはその日が何の日だか忘れていた。だって、他の家の子供みたいに、その日を待ち望んだ事なんてなかったんだから。

厨房にはルウシエルが立っていた。長の仕事の朝の風を速やかに流して、戻って来た所みたいだ。

「えと…、おはよう…」

今日は、僕は居る日かな？

「おはよう、カノン」

ルウシエルの手の中には、二人分の朝の食材があった。よかった、居る日だ。

しかし、カノンが、修練所へ行く用意をして居間へ入ると、

ルウは食卓に料理を並べかけて止まっていた。

「えと、えと…」

「貴方はルウシエル！」

「あ、ああ、私は…えと、ルウシエル…」

「僕は誰？」

「……………」

カノンは息を吐いた。

今日は修練所は遅刻だ。放っておいたらこのヒトは、スプーンを並べ掛けたまま、午前中一杯止まっているんだから。

「はい、スプーン、はいパン、はいスープ。無理に思い出そうと気張らなくていいから、今は、食べる事に専念して」

「どうもご親切に…」

「どういたしましてー！」

思い出せなくてじっと塞ぎ込んでいるより、しっかり食べて活動していた方が建設的だ。

スプーンをくわえたルウが、いきなり立ち上がって窓辺に寄った。

「呼んでいるな…」

「えっ？　何が？　誰が？」

暖めたミルクをカップに次ぎ分けながら、カノンが忙しげに

聞いた。

「部落の外だな、行こう」

「えっ?!」

ミルクを置き去りに外へ飛び出すルウシエルを、カノンも慌てて追い掛けた。

朝露の砂丘台地の上。

西風から出て来た二騎の馬に、白い青年と黒い女性が手を振った。

「フウヤ! カーリ!」

ルウの古い友人のこの二人は、カノンをホッとさせてくれる。ルウの記憶の中であまりソラと絡まないで、ルウの心を混乱させないのだ。

フウヤは吹いていた土笛から口を離して、ににっと笑った。

「僕ら西風の者ではないから、勝手に里へは入れない。一応ね」

「歓迎しよう、我が家に来てくれるのだらうっ」

「ありがと。その前に、足を運んで貰ったのに理由がある」

フウヤがカーリに目配せをし、今一度、土笛に唇を当てた。

——ピュルル——

こんなに小さい土笛から、どうして?! と驚く程、深く澄んだ音が響いた。音色を合図に、カーリはつま先立ち、しなやかに

に翔んだ。

「わあー!」

巷で評判の砂漠の舞姫の舞踏に、カノンは思わず目を奪われた。

土笛は優しいメロディを奏で、カーリはそれに沿ってなめらかに手足を滑らせる。

「この曲、知ってる…」

ルウが小さく呟いた。

そうだ、昔…ヤマアラシみたいな女の子…思い出した、リリ! 彼女が麻の書物の〈砂漠の星空の詩〉に付けてくれた曲だ。

久し振りの明るいつい出は、ルウの心を満たしてくれた。唇が自然に開き、暗記した詩を、囁くように詠じ始めたが、メロディに釣られて、いつしかピッタリ唄っていた。

カーリが砂の上とは思えない高いグラウンジュテをピタリと決め、曲が終わって、カノンは頬を紅潮させて拍手した。

「凄い! キレイ! カーリ、凄い!!」

「ありがと、ルウの唄、とてもいい。いつもよりノって踊れた。

詩の手カラ、凄じ

「あ…ああ、つい…」

ルウは俯うつむいて、鼻の頭を赤らめた。



「フウヤの笛も、いいな。つい乗せられて唄っちまった」
 フウヤはにっこり笑った。

「当たり前。この笛は、ルウの声に添うように造ったの」

「へええっ」

「最後の仕上げはモエギ殿に手伝って買った。ルウに声質が似ているからね」

言いながら、フウヤは土笛の紐を自分の首から外して、カノンの首に掛けた。

「はい、誕生日の贈り物(うしぜん)トー」

「えっ」

「今日、誕生日でしょ？どここの国でも、子供は誕生日を大人にお祝いして貰うものだよ」

「そっ、わらわからの贈り物は、今の舞踏だ。カノンの為に、心を込めて踊った」

「……………」

カノンは、誕生日の贈り物を買った事がない訳でもない。

幼い頃は、シドやエノシラが、ささやかに何かしらくれた。

だけれど、ルウを刺激するので、大っぴらに祝ったりはしなかった。

当のカノンも、自分の誕生日は、他所の子みたいに祝う物だと思っていなかった。だって、この日を境にルウはおかしくな

ったんだもの。そう…自分が生まれた日を、カノンは無意識に、(忌)んでいた。

「よかったな、カノン」

笛を手に戸惑うカノンの頭に、ルウが手を置いた。どうやら心の中に、自然にカノンの存在が戻ったみたいだ。

「私はその笛の音色が好きだ。早く吹けるようになれ」

「う、うん…」

カノンはしかし、まだ茫然としている。ずっと抱えて来た、生まれた日への負の想いは、そう簡単には融(と)けない。

「ルウシエル、わらわは喉が渴いた」

「ああ、茶を馳走しよう」

ルウとカーリが里へ向かって馬を進める後ろで、フウヤはわざと遅れて、そっとカノンに寄った。

「この曲を吹けば、ルウの中に今の出来事が蘇る」

「…?」

「その度にカーリの舞を思い出し、明るい楽しい心持ちになり、君の存在を、きちんと思い出してくれる」

「…!」

カノンは目を上げて、真っ白な睫毛の下の薄紫の瞳を見た。

…そうだ、このヒトも母親に忘れられた子供だった。ずっつと

前に、話してくれたんだ。

「フウヤ…」

「早く吹けるようになろうな、カノン」

「うん、あの…、フウヤ、ありがとう。誕生日の贈り物、本当にありがとう」

「ああ、誕生日おめでとう、カノン」

女性「人がお喋りしながらさっさと先に行ってしまう、ルウシエル宅へ消えた後も、フウヤとカノンは並んでゆっくり歩いていた。

「それはそうと、カノン、最近、気になった事、なかったか？
変わった話題とか」

「…？ ううん、別に」

「なら、いいんだ」

「…？」

カノンが何か聞き掛けた所で、繁みの曲がり角で赤いバンダナの少年と鉢合わせした。

「わお！ フウヤー！」

「おお、レン」

「カノン、朝の講義に来なかったから、ちょっと見に来たの。
でも、心配する事なかったみたいだね」

「い、いめえ」

「ううん、よかった。フウヤが来ているんなら、僕も後の講義、サポっちゃんおつかな」

「こら、それはいかん！」

レンの背後から太い腕が伸びて、癖っ毛の首根ッコを押さえられた。

「ス、スオウせんせ…！」

「教わる内にキチンと教わるのが子供の仕事だ。理由を付けてはサポッていると、スッカラカンな大人になっちゃうぞ」

「ふええ?! いいじゃない、フウヤだって色々教えてくれるよ」

「屁理屈を捏ねるな！ 次の鐘が鳴る前に修練所へ戻れ！ 駆け足!!」

レンは不服そうに、その場で何歩か足踏みしてから、駆け去った。

「ほ、僕も行きます」

カノンは慌てて、自宅へ教材を取りに行こうとした。その背中にもスオウが声を掛ける。

「カノンはいいよ。今日は休講で構わない。母上と古い友人とゆっくり過ごしてなさい」

「え〜こひいき〜!!」

繁みの影から、レンが「ジョリ」と顔を出した。

「まだいたのか！ 次の講義に遅れると、乗馬禁止罰だぞ！」
「それは嫌だあ!!」

今度こそレンは、坂の上の修練所めがけて、一直線に駆けて行った。

「待って、レン」

いつの間に、カノンが教材を抱えて、自宅の玄関から飛び出した。

「僕が帰るまでいてね、フウヤ」

「ああ、しっかり子供の仕事をやって来い」

のんびりと手を振ったフウヤは、そのまま視線をスオウに向けた。
「レンじゃないけれど、随分カノンに甘いんだね」

「ひいきじゃない、区別です。あの子は、普段から嫌でも余計に学ばねばならない事が多過ぎて…。額に縦線を入れていない珍しい顔をしているのを見たら、つい…」

スオウは段々シドモドになり、しまいに肩を竦めて苦笑いした。今だってレンと同じで、修練所を休んだカノンを心配して、業務をヒト任せにして、やって来たのだ。

ひいきするせんせが、必ずしも良くないせんせとは限らない。教え子は千差万別なんだから。

「それはそうと、フウヤ殿」

スオウが大きな身体を屈めて声を落とした。

「フウヤでいいよ、何か？」

「沿海州からの商人に、聞き捨てならぬ事を聞いた。あちらで仕事をしている貴方の耳にも、入っているかと？」

「西風のソラが生きているって噂？」

フウヤのサラリとした台詞に、繁みの影で息の止まった二人がいた。

立ち聞きするつもりだったんじゃない。カノンが教材の一つを忘れて、レンと一緒に取りに戻ったのだ。

「やはり貴方の耳にも入っていましたか。結構な噂になっているようで」

「ああ、だけれど、あれ、ガセだ。出鱈目」

「えっ、そうなんですか?！」

「丁度シドが来ていたから、二人で噂の出所を突き止めたんだ。何の事はない、他人の空似」

「はあ、他人の?」

「ああ、コトの真相は単純。鯨岩の街の子供が、出先で親とはぐれて怪我をした。通り掛かって手当てして、親の所まで送り届けてくれた人物が、ソラによく似ていただけだった」

「なんと、それだけ？」

「そうぞ、名前も違つし、山あいの村で生まれ育つたつて言う、全くの別人。親が、たまたまソラが常宿していた宿の主人だったんで、『ソラ殿が生き返つたと思つた！』なんて話したのが、ヒトの口を伝つて変な噂になつちやつただけ」

「ほお、ヒトの口とは怖い物ですねえ」

「その子供にも会つて話を聞いたけれど、そのヒト、博打で大負けしたつて言つて、何と、マントの下パンツ一丁つて出で立ちだったんだ。それで、へっぽこ勇者なんて名乗つて、陽気に唄つて肩車してくれたつて。それつてどう考えても、ソラじゃあないでしょう」

「はああ、確か」

「無責任な噂が流れて、モエギやルウの耳に入つていないか心配していただだけれど…、今の所、大丈夫みたいだね」

「いや、分かりました。私も、変な噂が入りそうになつたら、阻止するよう心掛けます」

「うん、まあ、出鱈目な噂なんて、すぐに消えさるさうつけれど」

スオウが会釈して修練所へ戻り、フウヤも建物に入つてから、物陰の二人はハナハナと出て来た。

「あああ…ビックリしたあ。凄いやつ聞いてちゃつたつて思つ

たけれど…、嘘の噂かあ。心臓に悪いよな」

「…うん……」

「まったく、父さんも、何も言つてくれないんだもん」

「レン、それは、半端な噂を部落内に持ち込まないようにしたんだよ」

「ふうん、お前凄いな、冷静じゃん」

「……ん…」

確かにカノンは冷静だったが、何となく上の空なのに、レンは気付かなかつた。

「行こうか、カノン、講義に遅れる」

「……………」

「カノン？」

「会つたんだるか？」

「えっ？」

「フウヤか、シドさんか…、その、他人の空似たヒトに、直接会つたんだるか？ フウヤの口振りだと、会つてはいないみたいだ」

「…？ だつて、名前も違つて、他所の村で生まれ育つたつて言つんでしょ。そりゃ、他人だよ」

「フウヤやシドさんは、そう言われたら他人だと思つんだらうね。ソラを信じているから。ソラの全部を分かっているつもり

でいるから」

「…？ カノンちゃん」

カノンの最後の言葉は独り言のように、口の中だけで呟いていた。

「大人って…、ホント、痒い所に手が届かないんだ……」

蒼い月が砂の上に規則的な影を描いている。夜露が表面で煌めいて、雪の原みたいだ。もっともカノンは雪の原を見た事なんか無いんだけど。

毛布と食料を積み込んだパロミノを曳いて、オレンシの瞳の少年は、これから踏み出す砂の原を、じっと見つめていた。

「カノン」

不意に呼ばれた。

蒼い月の下、青い癖っ毛の友達が立っていた。

「レン…」

「お前の行動なんてお見通しさ。悪いけど、カノンが母さんに宛てた窓辺の手紙、先に読んじゃった」

レンは、額が触れるかと思う距離までカノンに近付いた。

「まったく！ >暫く留守にするから、ルウシエルの事お願いします〜だって？ ダメダメ過ぎるよ！ あんなにお母さんを

大切にしていたお前がそんな書き方したら、かえって大騒ぎになるぞー！」

カノンはグツとなって黙った。

「沿海州の鯨岩の街まで行くつもりなんだろう？ 噂の主は他人の空似だってんじゃないか。いつもの冷静なお前はどこ行ったんだよ」

カノンは押し殺した表情のまま、首を横に振った。

「鯨岩へ行くんじゃない…」

「…？ じゃあ、何処へ行くの？」

「………」

「言いたくないの？」

「…じゅん…」

「頼むよ。お前に何かあったら、何処に助けに行けばいいのかわらぬ、知ってほしいよ」

懇願声になるレンに、カノンは俯うつむいたまま、口の中で小さく答えた。

「…蒼の里…」

思いも寄らない答えに、レンは目を丸くした。

沿海州どころじゃない。エノシラの故郷、北の果ての蒼の里は、飛ぶのに長けているシドだって、数日掛かる。

「だって、え？ ルウさんの忘れ病(やまい)は、蒼の里の長殿

が昔、何回も治療したんだろう？」

「ルウシエルの治療を頼みに行くんじゃない」

「じゃあ、何の用事があるって?！」

「……………」

黙りこくるカノンに、レンも無言で向かい合って、暫く時間が過ぎた。

「分かった！」

レンが沈黙を破った。

「待ってる、動くんじゃないぞー！」

そう言ってカノンの足元をピシッと指差して、里の中へ駆け込んで行った。

彼は両親に注進したりはしない…。カノンは言われた通り、大人しく待った。しかし、程なく戻って来たレンを見て、全身の血が足元に落ちこちた。

「駄目だ、レン、それはダメ!! 幾ら何でもヤバ過ぎる!!」

レンの手には、里でただ一頭のエノシラの草の馬が曳かれていた。

冷静なカノンだが、さすがに慌てた。

シドだのヌオウせんせだの、普段しょっちゅう怒らせている下下は、幾ら怒っても怖くない。怒らせたら本当におっかない

のは、普段は優しくして穏やかなヒトだ。

しかしレンは蒼白のカノンにお構いなしに、パロミノの荷物を外し始めた。

「そもそも、大人に黙って旅に出る事自体ヤバイんだ。腹くぐれよ。それとも蒼の里へ行きたいお前の気持ちは、そこ迄か?」

「…レン…」

確かにそうだ。蒼の里へ行くのを現実的に考えるのなら、空飛び草の馬の方がいいに決まっている。

「うめん、腹くぐるよ」

「そうと決まったら、とっとと荷物を乗せ替えようぜ」

「うん」

「装備は最小限にしよう。幾ら草の馬でも、二人乗りのだからな」

「ふ、二人乗りって?」

目を丸くして止まるカノンに、レンが手を休めないで言った。

「お前、草の馬に乗れるのか? 僕は一応何回か飛んでる」

「でも…」

「それに、僕が勝手に馬を引っ張り出して、嫌がるカノンを無理矢理誘ったって筋書きの方が、収まりがいいんだ。あのヒト達、カノンに理想的ないい子でいて欲しいから。ああ、毛布も二人で一枚でいいか」

「……………」

荷物を下ろされたパロミノは少し不満な目をしたが、草の馬とちょっと鼻面を合わせて、それから、素直に厩へ帰って行った。

「さて、行くか。グズグズしてたら、ファーが僕がいないのに気付いて騒ぎ出す。あいつ、勘だけはいんだ」

レンが先に乗ってポンポン叩く後ろに、カノンも肩を下ろして跨がった。手綱を張って馬銜を掛けると、馬はフワリと上昇した。

草の馬は、滑るような低空飛行で砂の原を飛んだ。地を歩くよりは速いけれど、思った程速度が出ない。

「うんと高度を上げると、気流に乗って速度が上がるんだけれど……」

カノンの不安を感じ取ったレンが言った。

「構わないよ。僕に気を使わないで、出来るだけ速く」

「分かった」

もう一度馬銜を掛けると、馬はグンと上昇した。多分、カノンには初めての高度だ。

真夜中でよかった。地上がはっきり見えたら、きっと目を回していた。

高度が安定して落ち着いた頃、カノンはそっと呟いた。

「僕、旅の目的さえ話してないのに……レン」

レンはうなじで答えた。

「カノンが言えないんだろ？。じゃあ、聞かない」

「………」

馬は、月明かりにうつすら見える砂丘や岩山を軽々飛び越え、たちまちカノンの来た事のない未知の景色になった。

「お前の手紙はポツにした。あれじゃ、一気に追っ手が掛かって、連れ戻されて問い詰められるぞ。僕が代わりに置いて来た手紙はこうだ。へかねてから、父上に勧められていた蒼の里へ留学に行く決心をしました。草の馬をお借りします。自力で旅して自分を試したいと思います。僕の誇るべき両親は、追い掛けて来て世話を焼くなんて、過保護な真似はしないよね。カノンも一緒に来てくれる事になったので、心配しないでね。カノンのお母さんを宜しく……どうだ、完璧だろ？」

レンは沈黙を埋めるように喋り続けた。

暖かい背中。この友達に何も言わずに、負担だけ分担させるのは、果たしていいコトなのだろうか？

カノンは決心した。軽蔑されても、彼には話すべきだろう。

「レンの想像通り……」

ポツンと話し始めた少年に、レンは口を閉じて耳を傾けた。

「会いに行くつもりなんだ。沿海州の谷あいの村の、他人の空似のそのヒトに」

「ん…」

「でも、きっと、ただ会っても何にもならない。そのヒトが例え…ソラ本人でも、名乗る気がないのなら」

「……………」

カノンは息を吐いて、紺から紫に変わる東の空を見つめた。

レンは黙って馬を飛ばしている。

「昔、フウヤに聞いた事があるんだ」

「…？」

「自分を捨てたお母さんを探しに行った時、蒼の里のナーガ長に手伝って貰ったって」

「…?!」

「風の末裔の術を引き継ぐ、蒼の里のナーガ長。そのヒトの術なら、一滴の血で、血を分けたヒトを確実に特定する事が出来るって」

「カノン…」

カノンは、目を射すような冷たい明けの暈を見上げて続けた。

「フウヤは、お母さんを一目見て、それで満足してその場を去ったって。親なんて、生きている間に自分で新たに作ればいんだって。何かの折に、僕を慰める為に話してくれたんだ」

「……………」

「多分、僕はフウヤみたいに黙って去れない。そのヒトに動かぬ証拠を突き付けて、ルウシエルの生き様をぶちまけると思う。」

そして、その先どうするか…、どんなに考えてみても、何も見えない。考えれば考えるほど、胸の中が真っ黒になるんだ」

レンは手綱をキュッと握った。カノンがいつもとだけけ忍んで、秘めて、耐えているか、結構知っていた。ただ…。

「レンもそのヒトが、他人の空似だと思っっているだろう？」

カノンは相変わらず真上を見上げながら言った。

「うん…、正直、父さんに聞いているのと、性格が違い過ぎる」

「ふふ、だよね」

「でも、行くんだろ、お前」

「うん」

カノンは、懐から薄い書物を取り出して、手を伸ばしてレンに見せた。

「ソラの部屋の棚の奥に、突っ込んであった」

ささくれた表紙に薄い文字が見える。

へっっぽこ勇者の物語

「……………」

「最初の方に、博打で負けて、マントにパンツ一丁になった件

くだりもあぬ」

「だって…、既製品の、おとき話なんだろう？」

カノン は静かに首を横に振った。

「ううん、直した跡が一杯あるし、中途なんだ。シドさんの持っている外交記録のソラの字と同じ。ソラが創作したんだ」

「……」

「完璧な大人程、隠しおおせるんだ。自分の子供な部分…」

夜が終わって陽が昇り、忙しく大空を横切って、今、西の空を黄色に染めている。眼下の砂漠が途切れ途切れになり、空気が湿り気を帯びて来た。

「カノン、あれ！」

馬の前に乗ったレンが、前方を指した。緑豊かな森が、地平の端から端まで広がっている。

「凄い！」

砂漠育ちの二人には初めて見る光景。

森の入り口に小さな流れが見え、裸地になっている場所がある。そこだけ平らにフカフカの砂で、居心地がよさそうだ。

着地して下馬すると、レンはハタハタと座り込んだ。これだけ草の馬を飛ばしたのは初めてで、集中が切れて、腰が抜けたのだ。

「今日はここまでじゅうぶん」

カノンは下馬すると、すぐに馬の装備を下ろした。体重が軽い子供とはいえ、二人乗りは馬の負担も大きい。まだ明るけれど、先の事を考えて、休んでおくべきだろう。

「馬に水を飲ませて来る」

カノンは馬の引き綱を取って、水筒を肩に担いだ。

「悪いな、みんなやらしまつて」

「いいよ、レンは休んでいて」

「焚き火くらい起こして。二人きりで野営なんて初めてだな。ワクワクする」

「は…」

ピクニック気分を一転させたのは、レンの悲鳴だった。

「ひゃああー!!」

泡噴って野営地に取って返したカノンも、悲鳴を上げそうになった。

鎌首を持ち上げた巨大ミスガ、森の奥から何匹も覗いているのだ。太さが大人の胴体程もある。レンは焚き火を挟んで尻もちを着いて、ミスガと睨み合いをしている。

「レン、短剣抜いて！」

カノンも腰の短剣を掴んで、レンの側まで駆け寄った。

「ちくしょー！ もう半年後だったら長剣を持っていたのに！」
西風の里では帯剣は十二歳からで、カノンより早生まれのレンも、長剣は提げていなかった。

子供の突き出す短剣なんて、大ミミズにとっては爪楊枝みたいなモンだ。ミミズは数を増やしなから、段々と間合いを詰めて来る。

「ヤバイって、逃げようー！」

「でも走り出すと一気に襲って来る…ような、気がする…」
頼みの草の馬は、水辺に置いて来てしまった。馴染みの馬じゃないから、呼んだって、多分来てくれない。

「カノン…！」

「レン…！」

二人背中を合わせて情けない声を出した時、頭上でバサバサバサツと音が響いた。同時に何かが落ちこちて、焚き火に直撃した。黒い煙がグワツツと湧いて、視界が真っ黒になる。

「うわわー！」

「げほほ」

真っ暗な中、後ろから肘を掴まれた。ミミズじゃない、ヒトの手だ。次の瞬間、頭の中から引き上げられる感触で、背筋がキュンと縮まって、二人は清浄な空気の中にいた。

黒い煙は足元でモウモウとしている。森の木々も遥か下で、

二人は上空に浮かんでいるのだ。

「えっ??? ええっ???」

「バアカ!! ミミズの巢の真っ只中で火を炊くなんて、アンタ達、ホントにバカだわよー！」

斜め上で甲高い声がして、見上げた二人は度肝が抜けた。

エノシラの馬と全然違う、鮮やかな竜胆りんどう色の草の馬！ その鞍上で腕組みしているのは、ファーと同じ位の女の子だった。紫の髪がヤマアラシみたいに広がり、衣装も馬具も紫紺(しこん)染め…と、紫くしの女の子。

「敵しい事を言っんじゃない。お陰で煙幕が使えたんだから、いいじゃないか」

今度は二人の真後ろで、落ち着いた男性の声が出た。

振り向いて、また二人は息を呑んだ。こんな綺麗な青があるのか? と思う位、深い湖みたいな青い瞳と髪と髪が、心配そうに覗き込んでいる。

二人の腕を掴んで引っ張り上げてくれたのはどうやらこのヒトで、レンとカノンは、取りあえずホツとした。幾ら何でも、ファー位の女の子に助けられたんじゃ、情けなさ過ぎる。

青年は大きな草の馬から身を乗り出して、逞しい腕で二人を



まとめて抱え上げていた。

「さてと、三人乗りは厳しいな。リリ、どちらか引き受けて、後ろに乗せてやってくれ」

「嫌あよ、あたしの若紫は、男子禁制なの」

「こっちだってオンナの世話になんかなるもんか!」

レンが精一杯、余裕のある振りをした。

「バーカバーカ、チビ! ドブス!!」

「何ですってえ?!」

「レン!!」

カノンが泡喰って遮った。

「ねえ、君…、えーと、リリ? 頼むよ、今だけ主旨を曲げて、僕を乗ってくれない?」

「ふん!」

女の子は鼻を広げて、カノンの横に馬を付けた。

「あんただけ、特別よ!」

「ああ、ありがとう、僕は…」

「西風のカノン、見りゃ分かるわよ」

「えっ?!」

一頭は黒い煙を避けて、森の奥の三日月湖の中洲へ着地した。そこには既に、エノシラの草の馬が心許なさそうに待っていた。

「何だよ、お前、ちゃっかり自分だけ逃げてたのかよ」

「バァカ!」

女の子は背筋をそらせて、レンを睨み付けた。

「あたしが助けなきゃ、大ミミズに襲われてた。自分の馬を守れないヒトに、草の馬に乗る資格なんてないわ! この子は持ち主の元に帰らせる。いいわね!」

少年二人は黙った。それは困るけれど…反論出来ない。

「まあまあ、リリ」

青年が割って入ってくれた。

「自己紹介が遅れたね。俺はユウジーン。蒼の里から君達を迎えに来たんだ」

「えええっ?」

「エノシラが、蒼の里と交信を取れる手段を持っていたの、知らなかったかい?」

焚き火に薪を放り込みながら、コバルトブルーのユウジーンは、畏(かしこ)まって座る二人の少年を、交互に見た。

二人ともフルフルと首を横に振る。

「ソラが行方知れずになった時、シドが不眠不休で蒼の里まで飛んで、ナーガ長に助けを求めたんだ。それで、今後何かあった時すぐSOSを届けられるようにと、ナーガ様が双子石を渡

したの、…これ位の」

ユウジーンが手で示す拳大の大きさを見て、レンは思い当たった。高い棚の奥の嚴重に包まれた翡翠石を引っ張り出して、こっぴどく叱られた事がある。

「その石を鯛で叩くと、キンと音が鳴る。双子石は離れていても共鳴するんだ。片割れは蒼の里の執務室にあるから、エノシラが連絡を取りたがっているのがすぐ分かるって寸法。ゆっくりに三回叩くと、通信用の鷹を超越せ。連打で緊急SOS」

「へええ、スコいや。何で母さん、内緒にしてたんだろ」

「あんたが面白がって連打しないようにでしょ」

「何だと、するかよー！」

ちよっと、したかも…、と思いながら、レンはリリに向かって、イーツと舌を出した。

「で、今朝早く石が鳴った。あ、夜間は僕が、石を預かっているんだ。んで、執務室に行つて鷹を飛ばした。エノシラからの通信は滅多にないけれど、いつもあまり明るい内容じゃなかった。大概、重い病気の患者の治療法の相談だったからね。でも今回は、鷹が帰って来た途端、蜂の巣をつついたみたいなきざりになった」

そこまで話して、ユウジーンはリリと顔を見合わせて、ニツ

と笑つて肩を竦めた。

「何で？ 何で、蜂の巣をつついたみたいになったの？」

レンが焦れて聞いた。

「そりゃあな」

「あの『西風のルウシエル』の子供がやって来るってんだもの！ リリが薪枝をボキッと折つて、焚き火に放り込んだ。」

「へ？」

それまで黙つて聞いていたカノンが、呆けた顔を上げた。

「その後はしっちゃかめっちゃか。ジェット気流飛行出来る者同士で、出迎え争奪戦」

「は…あ…」

「で、平等且つ神聖なアマタくじによって、俺がその栄誉を勝ち取つたのさ」

「そ…そうですか…」

ピンと来ていないカノンを、リリが覗き込んだ。

「あなたのお母さんは、それだけ人気者だったのよ」

「…にん・き・もの…」

カノンの頭の中のルウシエル年表では、彼女が蒼の里にいたのは、九歳の時のホンの三ヶ月程なのに？

「明日はジェット気流に乗せてやる。あつという間に蒼の里へ

着くぞ。着いた瞬間、揉みくちやになる覚悟しとけよ」

「……」

何だか照れて困ってしまったカノンを、レンが救ってくれた。

「何だよ、それじゃ僕はオマケかよ？」

「いいや」

ユウジーンは、今度はレンに真っ直ぐ向き直って、身を乗り出した。

「お前は、俺の弟だ」

「どひええっ？」

レンが飛び上がったって、座っていた倒木から落ちこちた。

「ダメダメ、ユウジーン、そんな言い方したら、この子、変な誤解してる」

「ああ、はっは」

「ああ、はっは」

青年は涼やかに目を細めた。

「エノシラはね、若い時からハウスの皆のお母さんをやっていたんだ。ハウスって、親のいない子供達の施設。俺もそこで育ったから、エノシラの事、母さんって呼んでいた」

「へえ〜」

そんな話は、うっすら聞いた覚えがある。

「だから里には、お前の兄貴姉貴が一杯だぞ」

「うっひゃ、ホント？ 僕もう長男やらなくていいの？」

「ああ、末っ子だ、味噌っ粕。兄貴達の言う事を、よく聞くだぞ」

「それは嫌だあ!!」

「ユウジーンの前で、レンも嬉しそうにカノンを見た。

「ね、母さん達、結構簡単に留学を許してくれたでしょ」

「…うん」

「大丈夫だって。ナーガ長さんに会ったら…」

レンはその後は口をバクバクだけして、親指を立てた。カノンの目的は忘れちゃいけないぞって意思表示だ。

「俺、修練所を出たばかりの修行時代、ずっとシドとソラと寝起きしていたんだよ」

二人の素振りにはあまり気に止めないで、ユウジーンは話を続けた。

「へえ、父さん、どんなだったの？ どうやって母さんを射止めたの？」

「その辺はシドの名誉の為に口を閉じていよう」

「ああん！」

「ここでユウジーンは、レンとばかり話しているのに気遣い、青銀の髪に話し掛けた。」

「ああん！」

「ここでユウジーンは、レンとばかり話しているのに気遣い、青銀の髪に話し掛けた。」

「ああん！」

「ここでユウジーンは、レンとばかり話しているのに気遣い、青銀の髪に話し掛けた。」

「ここでユウジーンは、レンとばかり話しているのに気遣い、青銀の髪に話し掛けた。」

「その時代、ソラは色々な事を教えてくれた。本当に何でも知っていてさ。様々な土地の歴史とか、哲学とか」

「…あ…は…」

「それが今、凄く役に立っている。感謝しているんだ、君のお父さんに」

「……………」

たちまち少年の額に縦線が入った。

「あの…、えと、僕、水汲んで来ます」

カノンは水筒を持って立ち上がった。

「水ならたっぷりあるぞ」

「んと、明日、高空飛行するんなら、今の内に汲んどこうかな

あ…とか…」

少年は苦しい言い訳をして、とっとと水場の方へ駆け出した。

ユウジーンはビックリしてレンを見て、レンは肩を竦めて溜め息を吐いた。

三日月形の湖の畔で、カノンは水筒を抱えて座り込んだ。

「ここでちょっと時間を潰そう。皆が眠くなる頃に戻れば、ソラの話をお聞きしよ。済む。」

「なあにやっつんのよ」

紫の前髪が、髪みから出て来た。レンと話す時よりも、声の

トーンが低い。

「夜宮の時の行動は二人一組だわ。そんな事も知らないの？」

「しゅん…」

「まったく、口答え坊主も嫌いだけれど、あんたみたいに何を怒られているのか考えもしないで、すぐに謝る子供も嫌いだよ」

「……………」

ずっと年下の女の子に居丈高に叱られて、さすがにカノンもむっとした。しかしリリはお構いなしにツカツカ歩いて、隣にドッカと座った。

「まあ、でも、ユウジーンも無神経だったわね。会った事もないお父さんを誉められてもねえ」

「……………」

「話の雰囲気から、あんたが喜ばなきゃいけない流れじゃない。

全然嬉しくもないのに」

「…!!」

カノンは目を見開いて、紫の女の子を見つめた。

「ああ、そんな目で見ないで。ただ何となく分かるだけよ。あたしも父さまと離れて育って、それに似た気持ちになった事があるから」

「そっなの？」

「皆が父さまの事を誉めるけれど、あたしにしたら、たまにし

か来ない、馴れ馴れしいオジサンだったわ」

「ぶっ…、うん、でも、何となく分かる」

「ん…ありがと」

リリは、今度は、考えないで答えてるとか言って怒りなかつた。ホントに、考えて答えているかどうか、判るみたいだ。

「でも、今はまあまあ仲良しなのよ」

「そっか…」

カノンがまた黙り込みそうになったので、リリは話を替えた。

「さっきナーガ長に会ったら…とか言っていたけれど、父さまに何か御用なの？」

「え？ えっと…」

「ナーガ・ラクシヤって、あたしの父親」

「えっ…」

「偉いのは父さまで、あたしは全然偉くないわよって、先に言うてく…どしたの？」

カノンがオレンジの瞳をたぎらせてにじり寄り来てたので、なすがのリリもたじろいだ。

「出来るの？ 君もっ」

「えっ、何？ 何なの？」

「蒼の長の術っての。『同じ血を持つ者を見分ける』って術！」

「あちゃあ…」

湖に行った二人が帰らないので様子を見に来たユウシーンは、湖畔の蜜柑の木に結び付けられたリリのスカーフを見て、額に手を当てた。

「どしたの？ 二人、どこ？」

レンが心配気の後から覗き込んだ。

「リリの奴、無理矢理着いて来たと思ったら…」

「…」

「アイツね、リリ。何て言っていかな、勘がいいんだ。そしてそれが割と当たる。憎たらしい事にね」

ユウシーンがスカーフを広げて振ると、例のこまっしゃくれた声が響いた。

「あたし、やっぱり、カノンに必要だったみたい。二人でやるべき事を果たしに行くから、ユウシーンはレンを連れて先に出發して。分かっていると思うけれど、手出し無用よ！」

「…まったへ」

「追い掛けるの？」

「いや、手出し無用と言つのなら、そうなんだろう」

「へえ？ あんなチビ助の言いなりになるの？」

「いやいや、レン。リリは成長するのがのんびりなだけで、あ

あ見えても、君よりずっと年上なんだぞ」

「ぶええっ?!」

「まあ、君みたいな子供相手に本気で言い合いするあたりは、子供なまんまなだけだね」

「はあ…」

スカーフを広げたユウジーンが溜め息を吐いている頃、竜胆(りんと)色の馬は、既に沿海州の街の灯を眼下に見ていた。

「ジャッホウ!!」

シエット気流から飛び出して、そのまま夜空を落っこちるみたいに垂直降下して来た馬は、街から外れた鯨岩の海岸の、重い砂を舞い上げて着地した。

「着いたわよ。どう、初めてのシエット気流飛行は…あれれ?」

後ろの少年は腕を硬直させて、リリにしがみ着いたまま気絶していた。

「おーい、カノン! カノン! はあ…軟弱ね」

漁師の細小屋に少年を引きずり運んで、リリは小さく息を吐いた。

「この少年から聞いたのは、ソラによく似たトトがいるから確かめたい…とだけだ。絶対にそれだけじゃないのは、彼の額の縦線から感じ取れる。」

「ルウシエル…」

風紋の砂丘で会った、燃えるようなオレンジの瞳のトモダチ。父さまは多くを語らないけれど、遠く離れる彼女の光がとても弱くなっているのは、何となく感じていた。

「あたし、あなたの役に立てるかな? あなたの大切なこの子の、額の縦線を消してあげられるかな?」

三日月湖の森から鯨岩の海岸まで、シエット気流に乗って飛び草の馬に、地上でただ一人、気付いた者がいた。

砂の民の部落の片隅の民家で、窓を開けて空を眺める女性に、口ウソクを持ったもう一つの影が近付いた。

「モエギ、どうした? どこか痛いかな?」

「いや、大丈夫だ、カーリ」

「身体が冷えるぞ。もう閉めよう」

「うん…しかし…」

「どうした?」

「風が乱れている。大きく荒れる前兆だ」

「風が来るのか?」

「そうだな…。良き嵐なのか、悪しき嵐なのか」

「良き嵐ってのもあるのか?」

「嵐は時として、あらゆる殿おりを洗い流してくれる」

「それが、良き風？」

「嵐が去った後、立っていらればな……」

カノンの眠る海岸より何里か北方。

海霧の溜まった山あいには、張り付くような小さな村が、ボツリとあった。切り立った山はそのままだ崖となって海に落ち込み、背後の険しい谷は、苔と瀑布に覆われる。海路も陸路も絶たれた、俗世から隔離した小さな村。

ここにもう一人、南の浜に降った流れ星を見つめる者がいた。

霧の隙間を過(よぎ)った、細い紫の光。

「凶星だわ。嫌な風が流れて来る……」

低い声で呟くその女性の髪も睫毛も、海霧のように薄い灰色だった。瞳も、唇も、額飾りまで、殆ど色のない、モノトーンの女性。

「アイシャ？」

振り向く自宅に鯨油のカンテラが柔らかく灯り、淡い人影が戸口に立って、こちらを見ている。霧の中の寒々とした風景の中、そこだけが暖かに色付いていた。

「どしたの、眠れないの？ 凶事を予知しちゃった？」

「いいえ、風も霧もいつも通り。変わりないわ。貴方は何も心配せずとも」

女性は霧に湿ったケープを被り直して、戸口へ戻った。

淡い人影の男性が、柔らかく迎え入れる。

「そう？ でも、この間から落ち着かなくない？ 僕が迷子を送って外のヒトに会った日から。やっぱり、勝手をしたので怒ってる？」

「いいえ、怒ってなんかいない。でももう、相談なしに、外の世界と関わらないで……」

女性が目を上げると、凄顔が真ん前にあった。顔の両側の皮を引っ張った間抜け面。

「ごめん！ 迷子の子供が可愛くてさ、つい……。怒らないで、笑ってよ、アイシャ、美人が台無し」

「バカ……」

アイシャと呼ばれた女性は、嘆き出すのを堪(こら)えて笑顔になった。

「本当に怒ってなんかいない。ただ、心配なの。外の世界は、本当に良くないのよ、アルト……」

「うん、分かったよ」

アルトと呼ばれた男性は、青銀の長い髪を肩から滑らせながら、優しく女性に寄り添った。

「ね、アルト、あのお話の続きをして頂戴。そうしたらきっと安心して眠れるわ」



「へっぼこ勇者のお話かい？ ホント、あれが好きだねえ」

「ええ、子供の頃からずうっと好きだわ。何回聞いても、ちっとも飽きない」

顔に何かが当たって、頬を伝った。

「う…うくん…ぶわっぶ!!」

眠りと覚醒の真ん中でまどろんでいたカノンの顔面に、いきなり冷たい水が浴びせられた。

「目が覚めた？」

網小屋にあったバケツをぶらぶらさせて、紫の前髪の女の子が、口の片端を上げた。

「しよっはい…」

カノンは舌を出して、顔をゴシゴシこすった。

「そりゃ、海の水はしょっぱいわ」

「むっつてっ」

「海の底で巨大ミミズがオシッコしているからや」

「えええっ」

「そんな事はどうでもいいでしょ。私達何の為にここに来たんだっけ?!」

「え、えとえと…」

寝起きで脳みそが働いてないカノンの頭の中では、ひたすら

巨大ミミズがのたくっていた。

「お父さんに会いに来たんでしょ!」

「あ…、ああっ、そうっ!!」

「じゃあどっどと街へ行って、お父さんの居場所の情報を聞き出してらっしゃい!」

「えっ、術で見付けてくれるんじゃないの？」

「甘ったれるんじゃないわよ!」

リリにお尻を蹴飛ばされるように、カノンは朝霧の浜を鯨岩の街へ歩いた。

噂なんてちょっと突っけばすぐに転がり出るのに、内気な少年は非常な苦勞をしてやっと、迷子が『へっぼこ勇者』に出会った場所を突き止める事が出来た。

「遅かったわね」

リリは浜の木陰で、自分の馬とコロコロしていた。いつの間にか手に入れたのか、棒付きの大きな飴をペロペロ舐めている。

「ソラのそっくりさんが出現した場所が分かったよ。北の海沿いの、竜返し of 滝の淵…」

カノンがゴクンと唾を呑み込みながら言った。

「ぶっん、じゃあ行きましょっ」

女の子はそっけなく言って、砂を払って立ち上がった。

「あ、あの、僕、足が棒みたいなんだ。あと、朝から何にも食べない……」

「それで？」

「そ、その飴を、ひとカケラ分けてくれない？」

「あたしと間接キスでもイイの？」

リリは小さい舌を突き出して、わざと飴全体をベローンと舐めた。

「……………」

「行くわよ、後ろに乗って」

情けない顔のカノンを後ろに乗せて、リリの若紫は大きく飛び上がった、真っ白な霧の空を、北の山岳地帯に向かった。

「あ…、そっぢゃなくて、竜返しの滝……」

「ええ、でも滝壺に住んでいる訳じゃあないでしょう？。飴売りのオジサンに聞いた話じゃ、滝の上流に一カ所だけヒトの住む場所があるって」

「……………」

「カマイタチで飴を切って実演販売を手伝ってあげたら、喜んで色々教えてくれたわ。情報は渡り商人に聞くのが一番だもの」

「……………」

「昔の戦で追いやられた少数部族の村だって。外に対して凄く警戒心を持っていて、馴染みの商人以外とは殆ど関わらないら……」

「……………じゃあ、僕は役立たずの無駄足だったんだ。最初からリリが調べるだけでよかったじゃな……フガツ!!」

拗ねて尖ったカノンの口に、舐め掛けの飴が突っ込まれた。

「今あたし、そんな話していたかしら?! ふふん、あのあたりね。不自然に霧が溜まってて、上空からはほとんど見えない。……成る程ね。急降下するわよ、掴まって」

カノンに何を言う隙も与えず、リリは山あいには立ち込める濃い霧の中に突っ込んで行った。落っこちるより早い降下に、置き去りにされないようしがみ付いているだけで精一杯……

「酷い! あんまりだわ! どーしてくれんのよ!!」

半泣きで怒鳴り散らすリリの後ろ頭には、棒の付いたままの飴が、ベッタリ貼り付いていた。

「じ、ごめん……」

部落から少し離れた森の中に降りたのだが、霧で地面が見えなくて、着地の衝撃で、飴をくわえたままリリの後頭部に顔をぶつけたのだ。

「レディの髪を何だと思ってるのよおお!!」

「だって…、リリが、もうちょっと優しく降りてくれたら…」

「ピトのせいにするの?！」

このあたりでカノンは、もうホントに嫌になった。

朝起きてから、リリはずっと意地悪しか言わない。お父さんを確かめる術を使って貰わねばならないから我慢していたけれど、もう限界だ。

「リリ、いい加減に…」

カノンが言い掛けた所で、背後の繁みが激しく揺れた。

「うわぁっ！」

悲鳴と共に林から飛び出て来たのは、小さい男の子と、続いて大きな猪だった。

「た、助けてえ！」

男の子の背中に尖った牙が届く寸前、ピュッという風切り音と共に、猪は弾き飛ばされた。リリが両手の指を立てて、カマイタチを起こしたのだ。

ピュピュピュッと更に猪の眼前で空気が火花を散らし、野生の獣は危機を感じて、林へ逃げ去った。

「タウト！」

繁みからもう一人飛び出して来た。今度は、長い髪を赤いリボンで束ねた少女だ。

二人とも同じ灰色の髪と瞳で、顔立ちが似ている。多分姉弟だろう。姉の方は、カノンより二つ三つ年上な感じだ。

「お姉ちゃん！」

男の子が駆け寄った。

「怖かった！あの子が助けてくれたの」

リボンの少女は、リリとカノンを見てピクツとしたが、気を取り直して礼を言おうとした。

それをリリが手で制して、ちょっと情けない声で言った。

「お礼の代わりに、これ、何とかしてくれない？」

彼女の後頭部は、風を使ったせいで、更に飴が絡まって、スゴイ事になっていた。

「切るのは駄目よ！生まれてこの方、前髪以外はハサミを入れた事ないんだから！」

何とか飴を取ってくれようと四苦八苦している少女に、リリが偉そうに怒鳴った。

「じゃあこの際、バツリ散髪しちまえば？」

カノンが投げやりに言った。

「髪を切ると、霊力が落ちるのよ！術が使えなくなってもいいの?！」

「えっ?！」

カノンはたじろいだが、すべホントかよ？　って目になった。

しかし、リボンの少女は、心得た顔で頷うなずいた。

「分かります、母様もよくそう言っています。」

「えっ、そうなの？」

「ねえ、アナタも巫女さんなの？　僕と同じ歳くらいなのに、

さっきの風の術、母様よりカッコよかった！」

男の子が聞いてきた。

「うん、まあね…」

リリは濁した。

「君達のお母さん、巫女様なの？　こんな山の中にも、神社(か

みやしろ)があるんだ？」

少女は表情を堅くして身構えた。

リリはお喋りが過ぎるカノンを睨んだが、男の子が答えてく

れた。

「うん、母様は、海神様の声を聞くの。海から来る風や霧を讀

んで、占いや予言もするんだよ。」

「この飴は、お湯がないと無理です。」

男の子のお喋りを遮って、少女は立ち上がった。

「部落へ戻って水と鍋を持って来るので、火を起こして釜戸を

組んでおいて下さい。」

「君達の部落へ行っちゃ駄目なの？」

カノンがまた無用心な発言をして、リリに睨まれた。

「駄目なんです。決まりで、知らないヒトは部落へ入れないの。」

「何で？」

「我等は落人(おちうぢ)の部落だからだ。」

声に振り向くと、林の前に、モノトーンの女性が、スラリと

立っていた。

「母様！」

少女は男の子の手を引いて、女性に駆け寄った。

「タウトが、猪の又シの穴に、足を突っ込んでしまったの。でも

このヒトが助けてくれて…」

「勝手に部落を抜け出したりするからだ。外の世界は危険が一

杯だと、いつも言っているだろう。」

女性は、少女の示すリリの方を向いて、丁寧に頭を下げた。

それから紫の頭に歩み寄って、後ろに手をかざした。シユワ

ッと白い冷気が立って、飴はキレイに髪から離れて、パラパラ

と落ちた。

「凄いやー！」

カノンが叫んだ。

「ありがとう、えと…」

リリも振り向いて、女性を見た。

周囲の霧に溶け込むような、色のない白い肌。細い灰色の髪が細かいウェーブを描いて、腰まで流れ落ちている。確かにこの髪なら、霊力があるって言っても、説得力がありそうだ。

「すまぬな、外の者には名乗らぬ」

女性は素っ気なく言った。

「昔、戦に巻き込まれて、沢山の大切な者を失った。だから、我等は俗世と隔離する事にした。外と関わらねば、争いも生まれない。何も失わずに済む」

「随分だね、リリはその子を助けたのに」

カノンが口を尖らせたが、女性は静かに男の子を振り向いた。

「タウトや、お前は何故、無用心に猪の巣を踏んでしまった？」

「雲の間から大きな光がこっちへ落ちるのを見たの。どうしても確かめたくって、近道しようとしたんだ」

男の子は無邪気に答え、カノンは罰悪そうに、リリと草の馬を交互に見た。

「災いはいつも外からやって来る…」

女性は、鉛のように重々しく呟いた。

「空を飛べるのなら、迷子でもなからう。速やかに立ち去ってくれ」

女性が子供達の肩を抱いて立ち去ろうとした時、再び林の方

から声がした。

「アイシャ、どこ？」

今度は大人の男性の声だ。

瞬間、女性の顔に動揺が走ったが、すぐに平静を装った。

カノンには分かった。今、繁みをかき分けて目の前に現れたそのヒトこそ、自分が探していたヒトだと。

…本当に、一目で分かった

西風の子供達の中で異質に浮いていた自分と同じ、色素の薄い髪…、肌…。そして何より、この身体中の血液が波打つ感じは、何…?!

その高揚した心は、しかし次の瞬間、地底に叩き落とされた。少女と男の子が、そのヒトを振り向いて、こう言ったのだ。

「父様——」

さすがにリリも、驚きの目を見開いた。

カノンは完璧に動揺している。だって、この姉弟の姉の方は、明らかにカノンよりも年上だ。やっぱり人違いだったの？

それとも…。

「……ソ、ソラ……？」

カノンが震え声で小さく呟いた。

しかしそのヒトは、カノンの小声を遮る大声で言った。

「さっきの流れ星は、君達かあ！ 凄いなー」

後ろめたさなど微塵もなさそうな、ワクワクした表情だ。

言葉が途切れて口をパクパクさせるカノンの前にアイシヤが立ち塞がり、男性から見えなくした。

「ね、アルト、子供達を連れて部落へ戻っていて。この少年は、私にご用なの」

さっきまでの冷徹さとは打って変わって、女性らしい柔らかい声だ。

「ああ、そうなの？ 分かった。おいで、シア、タウト」

アルトと呼ばれた男性は、あまりにあっさり、姉弟を連れて、霧の林へ消えた。

後にはカノンとリリ、それから焰のような目で二人を睨む、

アイシヤ。

「人違いだ」

アイシヤはきっぱり言った。

「以前も間違えられた。似た人物がいるようだな。さしずめ、お前の父親……といった所か？ 成る程、よく似ている」

灰色の女性は、スウツとカノンに近寄り、頬に手を掛けて顔を覗き込んだ。

「じゃ、じゃあ、何で先に帰しちゃったのさ」

カノンはその手を払い除けた。

「子供達に妙な話は聞かせたくない。例え人違いだとしても」

女性はカノンの前を離れて、リリに向いた。

「アルトは我が部落で生まれて今日まで育った。嘘だと思わないら、村人に確かめてみればいい」

「村人は大切な巫女様の為なら、偽りを口にするのをためらわないでしようね」

リリは腕組みして、アイシヤに負けない視線で睨み返した。

「……その幼子(おさな)の姿は、まやかしたな？」

アイシヤは低い声で唸った。

「ふん、海神の巫女様ってのも、伊達じゃなさそうね」

紫の前髪の下の強い目が、灰色の巫女をギッと見据えた。

二人の女性はギリギリと睨み合った。

やがて、紫の瞳の方が、フツと力を抜いた。

「やめた……」

「えっ?!」

カノンが慌てた目でリリを向いた。

「よく考えたら、あたしがこんなおっかないヒトと渡り合わないきゃならない筋合い、ないのよね」

「リ、リリ、そんな…」

「何よ、元々はあんたの事でしょ。自分で何とかしなさいよ！」

リリは不機嫌に片足をタンと踏み鳴らした。アイシヤもちょっと驚いた感じで、二人を見ている。

女の子は肩を怒らせて、大股で自分の馬に近付いて、鞍に手を掛けた。

「いつまでもヒトに頼って、ホントにウンザリ。付き合ってるんないー！」

「そ、そんなあ…、リリ…」

リリはカノンをチラとも見ないで、旋風を起こして飛び去ってしまった。

あんまりだ…。

茫然と立ち尽くすカノンの姿が余りに哀れだったのか、アイシヤが、気の毒そうに声を掛けた。

「置き去りとは、随分な友達だな」

「と、友達なんかじゃない！ 昨日知り合って…、手伝ってくれるって言ったのに…、あんな気紛れな子だったなんて…」

言っている内に、カノンは鼻声になった。何て事はない筈なのに、気の毒そうにされると、胸がこみ上げて来る。

「…まあ、一人では帰れなかつた。外に通じる海岸まで、案内

つてやる」

余程カノンの様子が憐れを誘ったのだろう。アイシヤはすっかり態度を和らげて、前に立って歩き始めた。

「さっきのそっくりさんに、もう一度会えない？」

素直に後ろを歩きながら、カノンはそっと聞いてみた。

「ヒト違いだと言ったろう。それとも会ってはつきりすれば、諦めが付くのか？」

「諦め？ どうだろう？」

カノンが意味ありげな言い方をしたので、女性は振り向いた。「僕、諦めなきゃならない程の執着はないもの。生まれた時からいないお父さんなんて」

「では何故捜しに来た？」

アイシヤはちょっと意外な顔をした。

「……書物の部屋が、取り壊しになるんだ」

「は？」

アイシヤは訳が分からなくて停止したが、当のカノンも、思わぬ自分の言葉に戸惑った。しかし、ちょっとした切っ掛けから、うやむやだった想いが、はっきり形を成して来た。

「ルウシエルが…ルウシエルとソラとを繋ぐ場所が、なくなっちゃった。その前に、ちゃんとけじめを付けてあげないと、ルウ

シエルは、永遠にあの部屋から出られなくなる。…そんな気がする」

「…ルウシエルというのは、お前の母親か？」

「うん…」

「母親を呼びには、変わった呼び方だな」

「だってルウシエル、僕に対して、誰だっけ？とかが聞くんだもん。あと、稀に、自分の名前も忘れる」

「……………」

「ソラがいなくなってから、過去の記憶が穴だらけになっちゃったんだって」

「……………」

「未来が、生きて来た過去の上に重ねて行く物だとしたら、ルウシエルの土台は、穴だらけのスカスカなんだ。えと…上手く言えないけれど…、そのスカスカの穴の上じゃ、ルウシエルはいつまで経っても未来へ行けないと思う。穴を埋めてあげなきゃ。どんな形になっても」

ドウドウという水音が近付いて来た。繁みを抜けると、広い河原になっていた。海岸に落ちる竜返し滝の、真上らしい。平らな水の流れが崖淵で速度を速めて、空に途切れている。

その遠く、霧が少し緩んだ隙間に、紺碧の一直線。

砂漠の砂以外の、海の地平線…初めて見た…。

「こっちだ」

茫然と海を見つめるカノンの脇を通って、アイシヤは慣れた感じで、流れの緩い所の飛び石を渡った。カノンも足を滑らせながら、へっぴり腰で着いて行く。

「これだ」

滝上の平石の上に、縄梯子が巻き上げられていた。先端は、大岩にくくり付けられている。

「これを降りると、海沿いに道がある。外との唯一の交通手段だ。決まった商人が来る時だけ、梯子を下ろす。先日はアルトが、滝下で倒れている子供を見つけて、つい降りてしまったよのだが」

カノンはそおっと、平石から身を乗り出した。垂直に落ちこちる水が、遥か真下で白煙を上げている。

「こ、ここを降りるの？」

「何だ、男の子の癖に恐いのか？」

アイシヤが、ゆっくり梯子を降ろし始めた。

「まあ、どうしても怖かったら、私が先に降りて、下で支えていてやってもいいぞ」

カノンは、女性の色のない横顔を、マシマシと見た。

「…優しいんだね」

「子供の癖に世辞なんか言っているんじゃない」

アイシヤはちよつと黙り込んでから、口を開いた。

「さっき言っていた…母親の過去の穴をどうやって埋めるか、考えているのか？」

「分かんないよ。いっそ、寂しい事も全て忘れさせる術でもあればいいの」

ガラガラと激しい音がして、半分降りていた梯子が、一気に下まで落ちてしまった。

アイシヤがビクッと揺れて、手を滑らしたのだ。

「あれね？」

子供達と部落へ戻る林の道で、アルトは前方を見て立ち止まった。霧に埋もれた道の先に、さっきの紫の前髪の女の子が、腕組みをして立っていたのだ。

「機嫌宜しゅう。えっと、アルトさん？」

「ああ、さっきはどうも。何かご用かい？ お嬢ちゃん」

「ええ、実は教えて欲しい事があって」

「何だい？ 僕に分かる事？」

リリは懐から、ささくれた古い書物を取り出した。

「この続きを教えて欲しいの」

「……」

「へっぽこ勇者の物語よ。連れの持ち物なんだけれどね。

昨日、連れに教えて貰ったんだけど、途中で途切れているらしいのよ、これ」

「……」

「へっぽこ勇者が、博打で無一文になって、恋人に指輪をあげる為に、ドラゴン退治を請け負うでしょ？ その先が、気になって気になってしょうがないの。教えて下さらない？」

「へっぽこ勇者は、ちゃんと生きて戻ったよ！」

アルトの代わりに、タウトが大きな声で答えた。

「恋人は、勇者の婚礼の衣装を縫って、待っていたんだ。僕も好きなお話だよ！」

嬉しそうなたウトと裏腹に、アルトは表情が止まっていた。

「…その書物、見せてくれる？」

「どうぞ」

リリが差し出す書物を、アルトはパラパラとめくった。

「へっぽこ勇者の物語……。確かに僕の創作した物だけれど、こんな書いた覚えがない」

姉弟も、書物を覗き込んだ。

「父様の話を聞いた通いの商人さんが、面白くと思って書き留めたのではない？ ほら、この間何日か泊まって行った、金物

修理のオジさんとか」

「そうかもしれないわね」

リリは深くは追求しないで、さっさと書物をしまった。

「凄いや！ 父様のお話が、外の世界の子供にも読まれているの。」

「そうね。続きが聞けてよかったわ。ハッピーエンドでホッとした。ああ、あたしは村へ入れなかったのよね。じゃあこれで」霧の中に部落の入り口らしき門柱が見えて、リリは後退りした。

「…お前達…、先に戻っていなさい」
アルトは少し緊張した声で言った。

ドウドウと水の落ちる滝上の平岩で、強こわばった表情のアイシャと、オレンシの瞳を見開いたカノンが対峙していた。自分の何気ない言葉が、この女性が激しく動揺させたのを、少年は見逃さなかった。

『寂しい事も全て忘れさせる術』…カノンは背筋がザワザワと泡立った。

「貴方は…、ヒトの記憶を操る術が、使えたりするのっ」

「無理だな。そんな便利な術があったら、ヒトは苦しまなくて済む…」

女性は、色のない唇で、スウツと言った。

カノンは再び背筋に冷たい物が流れた。彼女と対峙している自分の真後ろは、轟音と白煙を上げる滝の崖っぶちだ。

「アルトは…、アルトって言うのは…」

「アルトは、私の、唯一無二の、大切な者だ」

アイシャは胸の底から沸き上がるような声で言った。

「幼馴染みだ。小さい時から共に育った。勇気に溢れ、あらゆる術に長け、明るく、皆に好かれる、部落一の、勇者…」

「……………」

アイシャは段々に少年に迫った。カノンは動けない。一歩後ろは奈落なんだから。

「戦が起こり、侵略を受けた時も、先頭に立ち剣を振るった。

部落が多くの大切な者を失って、山岳に住み処を移し、長い刻(とき)哀しみに暮れていた間も、私は彼の帰りを待っていた」
「……………」

「そしてアルトは戻ったのだ。滝壺の淵に流れ着いて。私にはすぐ分かった。頭を打って色々忘れていたが、幼い頃の事を話す、すぐに思い出してくれた。そうして部落に飲びが戻り、停まっていた刻も動き出したのだ」



もうカノンには何が何だか考える事も出来なかった。だって興奮した女性がすぐ目の前に迫っていて、今にも自分をトンと突きそうなのだ。

「だが…、アルトは、私を忘れていた間、間違いを犯した。ある日、彼の全身の血が何処かへ曳かれるのを感じた。遠くで、彼の血を受けた者が、この世に産み落とされたのだ」

「…!!」

「だから…だから、私は念じた。二度と再びアルトを奪われぬよう…、その者が捜しに来ぬよう…。忘れてしまえ！ 忘れてしまえ！ 忘れてしまえ！ と…!!」

「あ…あ…あ…あ…!!」

カノンが叫んで、目の前の手に掴み掛かろうとした。アイシヤは咄嗟に、それを払い除けた。

「あ…!!」

少年は空中に手を泳がせて、すうっと崖の下に消えた。

「ヒトの記憶なんて、そうそう操作出来るモノじゃないわ」
リリは、若紫の後ろにアルトを乗せながら言った。

「父さまだって、ちょっと忘れさせたり、思い出させたりする程度。しかも必要に駆られた時だけよ」

「……………」

「でも時として、『強い思い』は、身の丈を超えた力をもたらす…」

「僕が戻って来た時…」

フワリと浮上する馬に、アルトは大して違和感を感じずに、話し続けた。

「村中皆が大喜びした。哀しみて停まっていた刻とかが動き出したと。皆、明日へ進まない無機な毎日を送っていた。新しい命は生まれず、子供達も成長出来なかったと。シアなんか、すうっと幼児のままだったらしい」

「シア?」

「僕が行方知れずになる前に、アイシヤとの間に生まれた子供。本当なら、タウトとはもっと年が離れた筈だった」

「…そう…」

「部落の皆は、事ある毎に、僕の昔話を語ってくれた。それに、アイシヤ…」

アルトは幼いリリに何て言っているのかと、ちょっと躊躇（ためら）うてから、続けた。

「アイシヤと…、その、『手を握り合う』と、二人で過ごした記憶が、鮮明に浮かぶんだ。いつしかそれが、アイシヤの記憶なのか、僕の記憶なのか、こっちゃんになっていた」

「……………」

全てが分かった。リリは若紫の手綱をしいた。

あのアイシャという女性は、自分でも意識せずに、ヒトの記憶に干渉する。

夕べ、ただならぬ者の気配を感じたから、カノンにはわざと嫌われておいた。カノンの心の中にリリを信頼する気持ちがあったなら、アイシャは立ち去るリリを放っておかなかろう。喧嘩して見せて、彼女の油断を誘ったから、こうしてアルトに近づく事も出来たのだ。

「でも…、しくじったわ！ 何て、深い、執念…！」

リリは、さっきからピンピン感じているアイシャの殺気で、鳥肌を立てていた。

「カノン・・・!!」

悲鳴もなく落ちた少年に、アイシャは我に返った。

我を失っていたのはコンマ何秒で、慌てて手を伸ばしたが、少年の身体に届かなかった。

「あああ！ 何て事!!」

身体中の血が凍り付くアイシャの真横を、疾風が駆け抜けた。目の端に映ったのは、竜胆のりんとく色の草の馬。それも一瞬だった。

滝淵から垂直降下した若紫が落水に弾かれるのと、その背から誰かが少年に飛び付くのと、同時だった。

弾かれた草の馬を、リリが必死に立て直す。

全て一瞬の中の出来事。

けど、落下するカノンは、誰かが自分を掴まえ、頭をしっかりと抱えてくれるのが分かった。

——ザフツ——!!

激しい衝撃。鼻と口から物凄い勢いで冷水が入って来た。

滝壺には魔が潜んでいる。泡のせいで、身体が浮かび上がらないのだ。

助けて…!! 身体が芯まで痺れて、手足の感覚がなくなる。

——ザツザアアア——!!

突然、水が激しく渦巻いた。水中で激しく翻弄されたと思ったら、いきなり周囲の水がなくなった。

「アウ……ゲホツゲホホ」

泥の上を転がされて水を吐くカノンに、鋭い声が飛んだ。

「手伝ってええ！」

目を上げると、水のなくなったすり鉢状の滝壺の底で、リリがアルトの下に潜り込んで、必死に抱え上げようとしていた。青銀の髪が真っ赤に染まっている。

慌てて駆け寄ろうとしたが、痺れた足が、いう事を聞かなかった。
「転ぶ——！」

誰かの手が延びる。ガツシリ支える肩と、赤いバンダナ。

「間に合った！」

「——レン!!」

アルトは既に、ユウジーンに拍き上げられていた。

「駆け上げられ!! 早く!!」

レンに支えられて、すり鉢の泥の中を必死でよじ登りながら上を見て、ビックリ仰天した。

滝壺にあった大量の水が、上空で渦巻いているのだ。

その真ん中で、両手を掲げて竜巻の大旋風を起こしている者がある。ここいらでこんな大技が使えるのは一人しかいない。

黒衣の馬に、オレンジの瞳の女性。

——西風のモエギ!! ——

「お、お、お祖母様!!」

「早くしろ・・・もう、もたないぞ・・・」

カノンが力を振り絞って、すり鉢の淵へ上がった瞬間、上空の水の塊がザンブと落っこちた。

「うわっぶぶ」

溢れる津波の中、レンがカノンに覆い被さって、流されない

よう必死で踏ん張ってくれた。

静かになって……カノンは顔を上げた。

霧は吹き飛ばされ、海辺の眩しい空が見える。滝は何事もなかったようにドウドウと落ち、ずぶ濡れのレンが、隣で荒い呼吸をしている。

離れた所でアルトが横たわり、その額に、モエギが掌を当てている。頭と、足にも、血が滲んでいる。止血をするユウジーン隣の隣でリリが、顔を上げてカノンを見た。

「水底で頭を打っちゃったのよ……」

覚えている。このヒトが、全身で、自分を護ってくれた。

「アルト——!!」

転がるように梯子を降りて、アイシャが走り寄って来た。

「アルト……アルト……!」

「心配要らない。意識が戻った」

モエギはアルトの額から掌を引いて、静かに言った。アイシヤが屈み込んで、自分の衣服の袖で、彼の顔を拭いた。

「う……」

アルトが小さく震えて、灰色の眼を開けた。そうしてゆっくり起き上がり、側に立つカノンを見上げた。



「……………」

二人、黙って見つめ合った。
リリがレンの袖を引いた。

「何だよ」

見ると、ユウジーンも立ち上がって、遠退こうとしている。

「トモダチは、よろめいた時に支えるだけでいいのよ」

今までみたいに居丈高じゃなくて、優しい言い方だった。

「うん、そだな…」

レンも素直に立ち上がり、三人はそっと海の方へ立ち去った。

アルトが口を開き掛けた時…。

「父様!!」

上方で声がした。

灰色の髪の子弟が、滝上から見下ろしている。二人ともさっきの竜巻を見たのだろう。酷く動揺して、二人一緒に梯子を降りようとしている。そんな様子では、危険だ。

「お前達…!! 駄目だ!」

アイシヤが慌てて二人を制そうとした。

カノンがスッとそちらを見上げて、よく通る声で叫んだ。

「君達のお父さんが、助けてくれたんだ!」

皆、一斉に少年を見た。

「大丈夫!　そこで待っておいで。へっばこ勇者は何があってもへっちらさぎ!　そうだろう?」

「うん!」

男の子が大声で答え、二人は梯子を降りるのを止めた。

カノンは、アルトに正面向いて一礼した。

「ありがとうございます」

そうしてオレンシの瞳で真っ直ぐ、青銀の髪を見た。ただ、見た。焼き付けるように。

「それじゃあ…お祖母様、行って参ります」

カノンは、しっかりとモエギに対峙して、言った。

「行っておいで」

モエギは柔らかに目を細めた。

「お前は、私の誇るべき、西風のカノンだ。どこへ行っても、そう言って胸を張るがいい」

「はい!」

少し離れた滝下のアルトとアイシヤにも目礼し、カノンは待たせていた三人の所へ走った。

そうして、二人乗りの二騎、煌めく水平線(ホライズン)を越えて、大空高く上昇し、点となって飛び去った。

その影が見えなくなるのを見届けてから、モエギはグラリと揺れた。

「悪いな、肩を貸してくれ」

アイシヤが慌てて彼女を支え、立ち上がれないままのアルトの側に座らせた。

「久々に会ったと思ったら、お互いポロポロだな、ソラ」
「……………」

青銀の髪のアルトは、じっと彼女の瞳を見つめた。懐かしい、暖かなオレンジ色。

子供の頃から、この瞳を知っている。この瞳の前では、何も繕えないって事も。

「僕は…すみません。その名を、名乗れる者ではありません」

「アルトとしてここに暮らすか？」

「……は」

「そっか…うん、お前らしいな。ここに、お前を必要とする者が、沢山いる」

「……」

「ルウシエルって女性(メド)は…？」

アイシヤが躊躇ためらいがちに聞いた。

「ルウには、あの子がごめん」

モエギが静かに言った。

灰色の女性は、黙って、オレンジの瞳の少年が飛び去った方向を見上げた。

「そして、あの子には、支えてくれる素晴らしい友がいる」

アルトも、口の中で小さく何か囁きながら、同じ方向の空を見上げた。

「あの…私…、私の罪……」

アイシヤが、モエギの前にしゃがんで俯うつむいた。

「私はあの子に恐ろしい事をした。ルウシエルってヒトにも…罰してくれ」

アルトは慌てて顔を上げて、懇願するようにモエギを見た。

「そっだな、だが、お前を罰する刃(やいば)を、私は持っている」
「でも…」

「では、彼(カ)に託そう」

モエギは滝上を指さした。幼い顔が二つ並んで、心配そうに見下ろしている。

「お前が償いたい気持ちのすべてを、あの子らに注げ。これから海霧で生まれる命を、強く広く真っ直ぐに育て。そういうのが巡り巡って、うんと未来に、皆を助ける事となる」

「ああ、分かった、必ず……!」

「アルト、助けてやってくれ」

「——はい」

「ええっ?」

鯨岩の街の中央広場。

最後の舞天使の像を制作中のフウヤは、いきなり現れたモエギに、びっくり仰天した。

「どうしたの? 出歩いたりして、大丈夫?」

駆け寄るフウヤの両手を、いきなりガッシリ掴んでモエギは言った。

「カーリを頼む。砂漠と病人以外の世界を見せてやってくれ」

「えっ?!」

フウヤは真顔になった。

「何だよ、それ? 縁起でもない……」

「馬鹿、私は大丈夫だ」

モエギはニヤリと笑って、心配そうなフウヤの額を弾いた。

「ただ、一日も早くカーリの幸せな姿を見たくて、もう待ちきれなくなったのだ」

蒼の里の静かな夜更け。

執務室の大机で、カンテラのオレンジに照らされて、蒼の長は静かに言った。

「カノンが生まれた時、私が試そうとしなかったかと思っただい?」

「血の力で血縁者を探す…、ルウがソラの子供を身籠ったと聞いたら、誰だっが一番にその考えが浮かぶだろう?」

「試さなかったの?」

長椅子に腹這いで書類を睨みながら、リリは顔を上げた。

「試したさ。ルウが不安定だったんで、ちょっと遅れたけれど、」

「二歳のカノンを連れて、沿海州に飛んだ」

「で、見つけられたの?」

「ああ。パロミノの見つかった谷と離れていた上に、強力な霧の呪術に護られていた。前回見つけれなかった訳だ」

「それで?」

「お前が見た通りさ。ソラは記憶をなくしていて、ソラの側には、小さな娘と、お腹の大きい妻がいた。西風のソラとは全然違うソラ。もう一人の『なりたかったソラ』だったのかもしれないね」

「……………」

「どうしようもない。真実を暴いても、誰も幸せになれない。

逆に、憎しみを生んでしまっただけ」

「……………」

「モエギ殿に打ち明けて、相談した。彼女も手をこまねいた。ルウシエルに告げようとしても、言った側から忘れてしまう。だから…待つ事にしたんだ」

「待つって？」

「小さなカノンが成長して、ルウの心の穴を埋められる存在になる日を…ホ」

「…あの子…」

「私達が思うより、すうっと早く立派になってくれたんだね、あの幼子が」

リリは止めていた手を再び動かして、書類に目を落とした。

「まだまだガキンチョよ」

「ふふ、匕下の事、言えるかい？ 『血で血を探す術』なんて、全然使えない癖に」

「・・・!! いいでしょ？ 必要ないって、初めから分かっていたわよ！」

「はいはい、我が娘もスクスク強烈に成長してくれて、喜ばしい限りだよ。でも、執務室の仕事を放ったらかして、いきなりいなくなるのは、宜しくな」

「イーだ!!」

リリがようやく書き上げた始末書を、大机にバンと置いた所

で、ユウジーンが入って来た。

「苦勞様、ユウジーン。二人は？」

「ベッドに入るなり、オヤスミ五秒です。その直前まで大興奮していたのに」

「ははは、男の子だな」

「手出し無用って言ったのに」

リリが恨みがましくユウジーンを睨み上げた。

「まあね、でも、レンがさ、カノンを置いて行ける訳ないって、テコでも動かなかった。それに、ソラを助ける美味しい所を残しておいてくれたリリには、感謝しているよ」

「…ふん」

リリは長椅子に戻り、カノンに借りた書物を繰り始めた。

これも彼女にとっては『光を放つ宝物』だった。不器用な『おとうさん』が、いつか出逢う我が子の為に、自分の子供な部分を曝さらけて書き溜めた、拙つたないおとぎ話・・・

ユウジーンは大机で長の仕事を手伝いながら、嬉しそうに話した。

「レンとカノン、あの二人を見ていると、何だか懐かしくて、キュンとなります」

「そう…」

長も群青色の長い髪を揺らして、目を細めた。

「久しぶりに三人暮らしだ。ワクワクですよ。シドとソラのベッド、置ぎっ放しでよかった」

「男三人なんて、ムサ苦しいったらありゃしない。そんな事で喜んでるから、お嫁さんが来ないのよ！」

「いざとなったらリリが来てくれるかい？」

「バア——カ!!」

二人のやり取りをニコニコと眺めていた長は、ふと、窓の外の日月へ目をやった。

海霧の部落にソラを発見した時…：実は、もう一つの事実も見付けていた。カノンの血が指したのは、アルトと弟タウトだけではなかったのだ…。

北の草原も砂漠の空も、三日月は変わりなくそこに在る。

砂の民の部落の外れ。モエギはベッドに横たわったまま、開いた窓からそれを見つめていた。もっとも、もう空か天井しか眺められないんだが。

ベッドサイドの椅子に座って、彼女の傍らにうつ伏せる者がある。彼女の愛する娘。

「ルウ…すまなかったな…」

「何で、母者が謝る？」

今、ひとしきり話し終えた所だ。ここ数日で、少しずつ記憶の穴の埋まりつつある娘に。

「私は、大昔に、ソラの居場所を分かっていたのに」

「…うん…」

「奴の首根っこを掴んで、お前の前に引きずって来る事も、出来たんだ」

「うん…分かっている。それをやっても、誰も幸せになれなかった」

「……」

「母者、私は今、幸せなんだ」

「幸せか？」

「ああ、溢れるように」

ルウは母の肩に頬を埋めたまま、オレンジの瞳を向けた。彼女の瞳にも、月が映っている。

「ソラは…、冷たい谷で辛い思いをして、寂しく生を閉じたんじゃないかった。ずうっと欲しがっていた暖かい家族に囲まれて、幸せに暮らしている。こんなに嬉しい事はない」

「…ルウ…」

「私は今、幸せな思いで一杯だ。以前の私だったら、その家族が自分ではない事に、悲嘆にくれていただろう。今だから、そ

う思えるんだ。だから、その時、母者がそっとしておいてくれたのは、きつと正解だったんだ」

ソラノ記憶が戻る事で心の穴を埋めたのは、しかしソラへの思慕ではなかった。

ソラがいたからこそ、自分の人生いま。

ソラが残してくれた、未来へへの希望。

「カノンに感謝しなければ。私には出来過ぎた、天からの授かり物だ」

「ああ、そうだな…」

モエギは目を閉じた。もう一つ、言っていない事実がある。

隠す事ではないが、強いて広める事でもなからう。

哀しみで刻とときの止まった海霧の部落。一体、幾星霜、刻が止まっていたのだろう？

幼い頃、母の浅葱(アサギ)に聞いた、昔話。

砂漠の地が争いで荒んでいた暗黒の時代。流れ着いた他所者の剣士を、里の娘が手当てした。剣士は戦で故郷を奪われ、帰る場所をなくしていた。

里の娘を伴侶とし、里の住人となった彼は、里の為に闘い、

この地で命を終えた。彼の子供達は皆少し色素が薄く、皆少し心を通わす術が使えた。

剣士の名は、アルトワークスといった。

そう、カノンの血は、遠く彼の祖先である本物のアルトの娘、シアをも差したのだ。

里で育まれたアルトの末裔が、今、故郷の刻を動かして、アルトとして舞い戻った。縁(えにし)とは、不思議なモノ……。

「ルウシエル…」

「何、母者？」

この娘や、この娘の子供達、自分の愛した多くの者達、皆々が関わり合って、限らない明日を紡(つむ)いで行くのだろう。

それを思うと、今ここで去ることは、ちっとも寂しくない。

「ハトウンを呼んでくれ…」

「うん、分かった。待ってて」

粕鹿毛に跨がって飛び去る娘の頭上には、大熊座と胡桃の木。その梢近くの頂に、二人の薄い人影があった。

浅葱色の内掛けをまとった女性と、寄り添うように腰掛ける、オレンジの瞳の男性……。

くおしまい